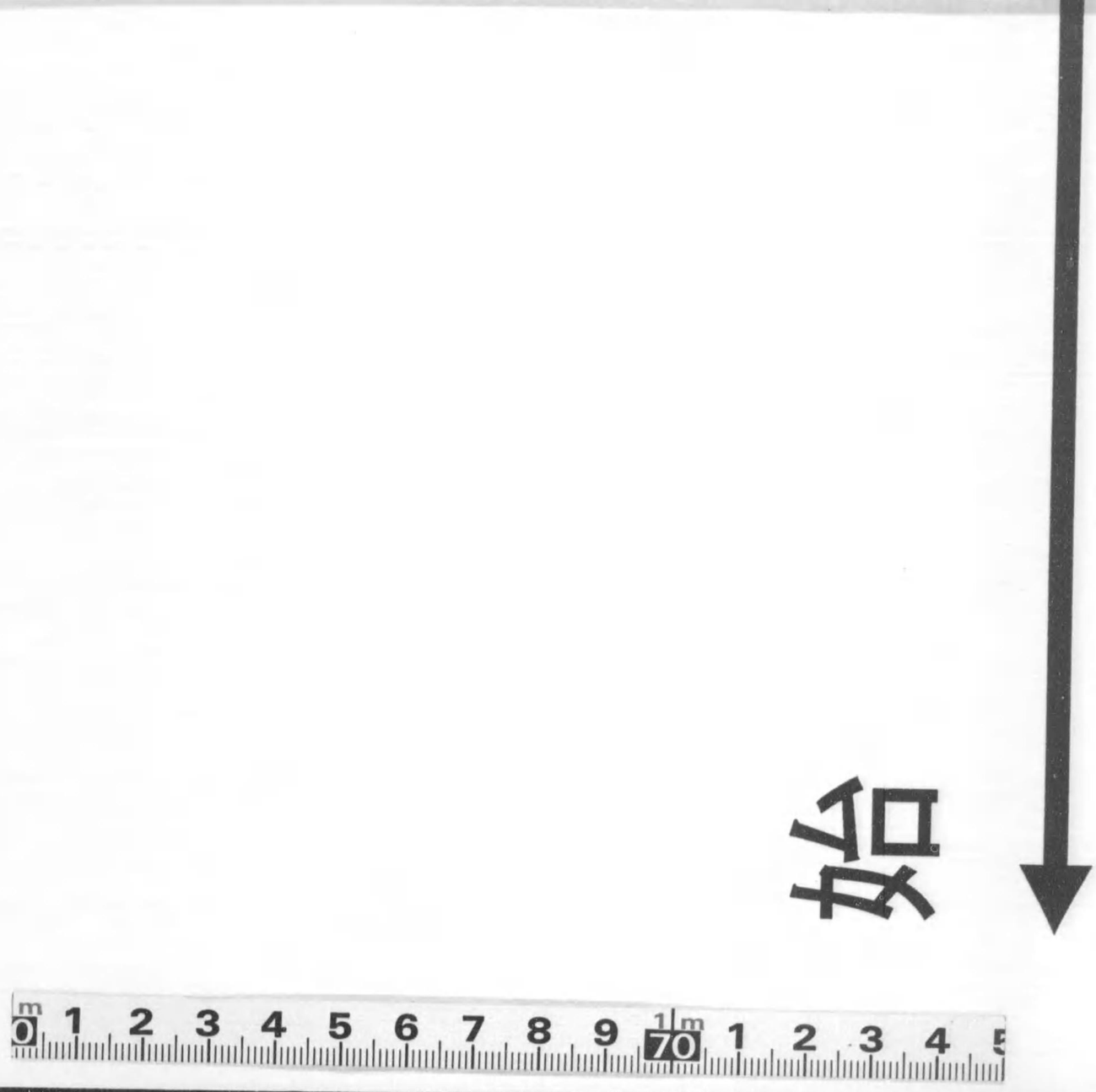


325
235

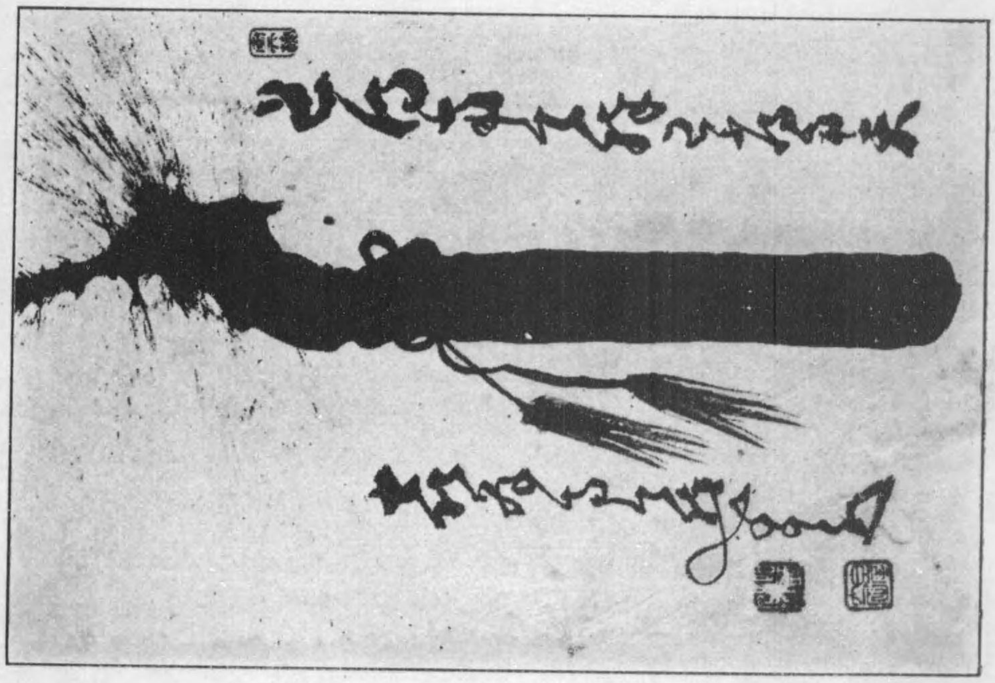
325-235

南天棒禪話

中原鄧州著

大正
4. 9. 16
内交

南天棒劉州老師



序

嗟澆季哉。人心愈危。道心益微。禪林秋深。學園霜寒。行無良友退無明師。誰不慨嘆乎。今日驀然南天棒禪話出焉。片言如大火聚。隻字如熱鐵橛。格龍蛇眼正。檎虎兕機全。就中菩提心與宗匠檢法其尤者也。若人如實讀得牛皮也穿。則忘自忘他。忘迷忘悟。到忘忘忘亦忘。不思拍手大笑。予先一讀。不能禁。序以促諸子一讀云爾。

大正乙卯南窓寄傲之下　　栽松　大石正巳識

目次

一、什麼生是南天棒禪話……一
二、默誅舌誅筆誅……二
三、教外別傳不立文字……七
四、達磨の種類……九
五、碧巖第一則提唱……一四
六、白雲端の不識に向ての頌……二〇
七、大燈國師は再來の達磨……二二
八、衣を着ても狐なりけり……二三
九、禪はどうしても亡ぼされぬ……二四
十、法滅盡經の事……二六

十一、中峰和尚座右銘……二八
十二、今の坊主は動機が違ふ……三一
十三、南天棒は日蓮が好き……三七
十四、南天棒の自贊付臨濟遷化話……三九
十五、白隱の自贊……四一
十六、正受老人の自贊……四一
十七、愚堂國師自贊……四二
十八、死んで何處へ行く付七賢女の事……四三
十九、唯因果無人……五〇
二十、人が犬に生れるか……五六
二十一、因果律……六〇
二十二、大乘盛んなるは法滅盡の徵……六四
二十三、鐵舟と宗演……六八
二十四、手紙三十貫……七一
二十五、壽塔及び棺桶否な棺壺……七三
二十六、禪の特色……七五
二十七、印可狀(嗣書)……七七
二十八、宗匠檢定法……七九
二十九、衣鉢の事……八一
三十、黃檗臨濟の傳受……八四
三十一、臨濟の印可に付き僞仰父子の評……八七
三十二、冬瓜印子の事……九〇
三十三、他宗の安心には證明がない……九一
三十四、無免許醫は危險なり……九三

三十五、各宗の所以相承……九五
三十六、邪決定、正決定……九八
三十七、禪は公宗である各宗は私宗なり……九九
三十八、禪餘の各宗は悉く外道なり……一〇一
三十九、我國禪界の現狀底……一〇四
四　十、壽塔の事……一〇九
四十一、疎山壽塔は難透の隨一……一一一
四十二、南天棒は七十九代的々相承の祖……一一四
四十三、六十小刼猶如半日……一一八
四十四、正法眼藏嗣書の卷拔萃……一二〇
四十五、徒然草大尾兼好八歳の時の難問……一二六
四十六、佛說三身壽量無邊經……一二七
四十七、常不輕菩薩……一二九
四十八、何故に南天棒と呼ぶ……一三〇
四十九、本名……一三二
五　十、南天棒今は八幡の僧堂にあり……一三三
五十一、衲の手の甲は胼胝になつた……一三四
五十二、逼參せし二十四名の師家……一三五
五十三、東山下の左邊亭……一三九
五十四、黃龍三關……一四〇
五十五、如何是南天棒生緣……一四二
五十六、七歳母を失うて無常を觀じた……一四三
五十七、十一歳坊主になる……一四五
五十八、雜業報經三種の孝……一四六

五十九、十八歳初めて僧堂に掛錫……一四八
六十、廿三歳始めて羅山に相見す……一五一
六十一、大石に躓かず小石に躓く……一五三
六十二、良哲居士惠昌尼に一拶さる……一五五
六十三、慢心は室内の禁物……一五七
六十四、欽山定上座に殺されんとす付黄楊木禪の事……一五八
六十五、山上有山の古詩……一六一
六十六、啓予足啓予手……一六五
六十七、病中と雖も參禪をたゝず……一七〇
六十八、豎子何をかなさん……一七四
六十九、南天棒は何處までも精力主義……一七八
七十、白隱達磨の贊……一七九
七十一、獨園と越溪……一八〇
七十二、生寃家を思ひをなせ付葉縣省和尚……一八三
七十三、大石良雄の忍辱行……一八五
七十四、大石の沒縱跡……一八七
七十五、大石も失敗があつた……一八八
七十六、馬鹿になれ……一九〇
七十七、寶鏡三昧……一九一
七十八、祖英集革轍二門頌……一九三
七十九、閑古錐の事……一九七
八十、老古錐七蒲下……一九八
八十一、小兒になれ……一九九
八十二、上大人丘乙巳……二〇二

八十三、南天下の圖相……二〇四
八十四、碧巖八十則……二〇五
八十五、小供に付て禪家者流の誤謬……二〇八
八十六、千年以前小兒の詩……二一一
八十七、衲は備前の岡山そだち……二一三
八十八、桃栗三年柿八年……二一四
八十九、おれは十九……二一七
九十、南泉十八上……二一八
九十一、趙州十八上……二一九
九十二、趙州二十年何事をかなす……二二〇
九十三、貧になれ……二二四
九十四、大燈國師乞食中の詩……二二七

九十五、雪竇大師遺偈……二二九
九十六、比丘の本義……二三〇
九十七、道得三十棒道不得三十棒……二三二
九十八、德山の棒……二三四
九十九、瑞巖入寺の偈……二三六
百、宗匠檢定法(再び)……二三七
百一、宗匠檢定法の內容……二四一
百二、無字付道元禪師の無字觀……二四五
百三、無門和尙無字工夫の方法……二五一
百四、貞女不見兩夫……二五五
百五、當今の所謂無字の眞相……二五六
百六、拶處一斑……二五七

百　七、無字の證據……二五八
百　八、生死透脫の無字……二五九
百　九、無字の姿……二五九
百　十、中峯八個の無字……二六〇
百十一、二十の無字……二六二
百十二、趙州の露刃劍……二六三
百十三、大慧の無字……二六六
百十四、無字をみて何にする……二六七
百十五、無字の根源……二六八
百十六、業識性の無字……二六九
百十七、有の無字及び知而故犯の無字……二七〇
百十八、語の顚末……二七三
百十九、無字の總語……二七四
百二十、最後の一關……二七六
百二十一、菩提心の一大事……二七八
百二十二、菩提心なければ無字なし……二八二
百二十三、禪の發願文……二八三
百二十四、櫺隱の初相見……二八五
百二十五、看經諷誦……二八七
百二十六、山岡は經を寫した……二八九
百二十七、山岡の死……二九一
百二十八、山岡に初めて逢うた……二九二
百二十九、明治十八年市ヶ谷道林寺……二九四
百　三十、陛下御參禪の御所……二九五

百三十一、眞の報恩……二九六
百三十二、兒玉將軍の禪……二九八
百三十三、乃木將軍の初發心……三〇〇
百三十四、口邊白醭を生ず……三〇一
百三十五、將軍との因緣淺からず……三〇二
百三十六、乃木將軍は坊主嫌ひ……三〇三
百三十七、殉死の時萬歲の電報……三〇四
百三十八、自刄の原因……三〇五
百三十九、乃木將軍と季札……三〇八
百四十、將軍西宮海淸寺に來る……三〇九
百四十一、遺族よりの形見……三一二
百四十二、坊主の葬儀に列せしは衲一人……三一二

百四十三、第二隻手音聲……三一三
百四十四、商人の隻手の歌……三一七
百四十五、峨山の隻手……三一九
百四十六、隻手と無字と同か異か……三二〇
百四十七、拶處一斑(再び)……三二一
百四十八、乃木の自刄は衲の贈りし由多加織の上……三二九
百四十九、機關は禪の花……三三〇
百五十、機關の一斑……三三二
百五十一、無舌居士圓朝……三三七
百五十二、一婆彌陀となる……三三八
百五十三、淨土門でもほんまの者がある……三四〇
百五十四、法身一斑……三四五

325－235

百五十五、荷葉團々……三四七
百五十六、言詮一斑……三五二
百五十七、川中島の禪戰……三五七
百五十八、法窟の爪牙一斑……三五九
百五十九、無門關一斑……三六七
百　六十、德本行者の念佛……三七三
百六十一、碧巖一斑……三七五

以上

一、什麼生是南天棒禪話

なに南天棒禪話とな。つまり衲の言行錄を書かうといふのか。聲爲律身爲度といふこともある。しつかりやるがよい。何事も法の爲ぢや。おれも兎角時間はないが、法の爲とあれば、割愛するに吝ならぬぞ。古人は色と聲を大にしなかつた。廣告はしなかつた方だが、學人の方から、撥草瞻風してやつて來たものだ。桃李不言下自成蹊といふ氣味があつた。今はいくら叫んでも、向うの唾りが深いから、中々出て來るやつがない。そのまゝにしておけば、禪は亡びてしまう計りだ。夫れ佛法は叩時機當行運ぢや。所謂時代思想ぢや。今日言論交通の盛んなる世の中では、書物をこしらへて、自己の抱負を世に介するといふことは、なくてならぬことぢや。これもやはり菩薩道ぢや。

佛の廣長舌相は、普覆三千大千世界とある。何處までも廣く行きわたつてをるといふことぢやらう。南天棒の長さも可成く延ばしたい。一人でもより多くを、自己に同化せねば一分たゝぬぞ。しかし書經三寫烏焉成馬といふから、間違のないやうに氣をつけるがよい。南天棒世界船成猫杓子共乘行。

二、默誅。舌誅。筆誅。

誅とは勦絶ぢや。何も追拂つた所ぢや。元來物は單なる者ぢや。禪の字が偶々示單の二字から成てをるのも、名詮自性ぢや。何物か添物がある內は、話相手にならぬ。誅の字參究物ぢや。殺せ殺せ吾身を殺せ殺し果てゝ、何もなき時人の師となれ。無難禪師の歌ぢや。

(1) 默誅

は向上門ぢや。維摩の一默に遇ては、流石の文殊も退倒三千ぢや。雪竇も碧巖で維摩道什麼と橫槍をいれたが、元來一默に痕迹がないから、なんと云つても屆くものでない。達磨九年の面壁は、とう〳〵二祖の腕を斷らした。曇希叟は此土西天示衲僧樣と褒めた。打つのもすてに老婆よ。喝するのももう說明ぢや。默つてをる程孤危嶮峻の接得はない。勿論法は一ぱい〳〵の者で、寄り付かるゝものでない。等閑に觸著すれば火星飛ぶぢや。長沙の三默は、千古の葛藤を切て三段となした。三聖も恁麼勝臨濟七步といつた。たとへ關山が、柏樹子話有、賊機とのみ言ひ殘しても、すてに一句てもいへば、もはや遲八刻ぢや。一默の前にはどうしても腦門著地ぢや。今日ては默する師家もないが、誅下に中る衝天の弟子もない。南天禪は元來この默誅をとるのぢや。棒を振ふはすてに辜負いてをる。されど澆季の悲しさ、面壁ばか

りては買手がない。あゝ棒も亦已むを得ざる者か。咄。好事不レ如レ無。

(2) 舌誅

今日の禪は筆舌の禪ぢや。實に便りがないが、筆舌も涙さへあれば、感應道交がある者ぢや。寸鐵殺人といふ語がある。三寸は舌、六寸は筆ぢや。決して捨つべき者でない。

舌誅は直接ぢやから、感激を與ふる事が深いが、廣く多くの人に及ぼすことが出來ぬ。天桂の法華會上には、一萬人來たといふことぢや。二百六十年前交通不便の時ぢや、其雄辯が今に想像さるゝよ。今時我等の提唱に、血を吐いてやつても、千人集むることは容易でない。臨濟の一喝、無業の莫妄想、雲門の乾屎橛、洞山の麻三斤などは、向上の舌誅ぢやが、入室、上堂、提唱、講義、さては公會演說、坐談、どれでもよい、機に應じてどし〳〵遣るがよい。砂漠の中に金剛石がある。眞理は何處にも伏在してをるぞ。古人曰はずや、麁言輭語皆歸第一義と。仙崖禪師曰、屁なりとてあだなる物と思ふなよ、佛といふ字も佛なりけり。而も與麼なりといへども、開口不在舌頭上、無舌人の解語こそ喝。

(3) 筆誅

は祖錄其魁たる者ぢや。しかし隨筆、手紙、新聞、雜誌、何にても書くがよい。讀むがよい。おれの機關雜誌には、棒喝といふのがある。隨分一部の功をあげてをる。白隱はちよぼくれ。あほだら經。粉引歌などをかいて渡されたぞ。盤桂和尙の臼引歌は實によいよ。祖錄は祖師の涙である。祖錄を讀んで泣かざる者は、共に道を語るに足らぬ。俗すら、孔明出師表、李密陳情表を讀んで泣かざる者は、人に非ずとさへいうてをる。とかく腕頭に涙がなければ、いくら巧者に書いても、人を泣かしむることは出來ぬ。衲も釋迦的々七十九代ぢや。この南天禪話

も後世には、祖錄と云うてあらう。只今日は相似の禪を慶にする爲め、滿身の涙をそゝぐ覺悟だ。いやこの書物ばかりではない、おれは日々手紙を書くことが大好で、夜の三時頃から起きて、手紙を書いて居る。大惠禪師もさうであつた。大惠書は皆手紙ぢや。白隱の遠羅天釜も手紙ぢや。人が一通よこせば、おれは二通やる。隨分手紙で悟つた漢がある。緣は何方にあるかも知れぬぞ。おれのことを世間では、手紙鄧州と醜名をつけて居るげな。正月の年始狀も、三千通に下つたことはない。南天棒の一擧一動、一言一筆、菩提道心の涙ならぬはないぞ。どうかこの禪話を讀んで、從前の惡智惡覺を蕩盡し、先入爲主の妄見を打破し、也太奇也太奇と躍り出す者もあれかしと、侍者共のすゝむるまゝに、日々書かしてをるのぢや。おれは若い時から坐禪計りやつて、文章や、お喋舌りを學ぶ暇がなかつたから、すべて下手が、涙はどこでも涙である。只その涙を讀んでくれゝばよいのだ。南天の棒より落る涙川、名利の禪を洗ひ流さん。

筆誅は間接ぢやから、舌誅よりは感動が鈍いが、書いた者はいくら遠方へても持つて行かるゝ。何時でも見らるゝ。且世を隔てゝ永く展轉する事が出來る。しかし書不盡言言不盡意で、思ふやうには書けぬものぢや。兎角は冷煖自知するより外はない。一字不打劃八字無ノヘ。

三、教外別傳。不立文字

仙崖の歌に、音もなく香もなく文字もなき道は、片足くつと蘆の葉の舟といふのがある。これは達磨の事をいうた者だ。達磨は印度二十八代の祖師で、支那での初祖ぢや。達磨は支那に入つて劈頭第一に禪の本領を公示した。即これが有名なる教外別傳、不立文字、直指人心見性

成佛の四句偈である。日蓮の四個格言見たやうに、各宗を根柢から覆へそうとかゝつたやうに見える。達磨にはそんなけちな心は無かつたが、自然にそんな風に聞える。そして九年間唯面壁して何も云はない。餘り物が大きいから入るゝ器がなかつた。そこで敵も出來た。誤解も出來る。壁觀婆羅門などゝ評するに至つた。始め武帝に遇うたが、ぺけぢやつた。早速見切をつけたは達磨の偉い處だ。然しとう〳〵腕を截つた、一人の二祖惠可大師を得て、師匠の遺囑を全うすることが出來た。もう何時死んでもよい。時に二人の犬、菩提流支三藏と光統律師とが、達磨を盲算誤認して、七度毒殺を企て、七度目に化緣つきて殺された。因緣なれば佛祖も免るゝことが出來ぬ。釋迦も提婆に足を傷けられた。しかし權化の死生は凡庸の窺ひ知る所でない。達磨も死後葱嶺に宋雲に遇ひ、聖德太子は片岡に遭うた。委くは達磨三朝傳を讀めば分る。いや〳〵達磨は今に死なぬぞ。この大目玉の南天棒となつて、禪界の大黑柱となり、大船となり、大活動をなしつゝあるぞ。看看。清風匝地有何極。

四、達磨の種類

隻履達磨。これが所謂仙崖の片足履ぢや。葱嶺を越ゆる時、達磨は片手に履片足を持つて居つた。宋雲歸り來れば、達磨は既に死したりとのことなれば、不思議に思うて、棺を開いて見たら何にもない。只履の片足丈けがあつたとのことぢや。達磨忌や今に尋る履片足といふ句がある。衲が拶所に達磨の履を持つて來いといふ公案がある。

一葦達磨又渡江達磨。仙崖の蘆の葉の舟といふやつぢや。いくら神通があつたとて、この重いからだが、どうして葦の葉に乘つて行かれう。

これは小舟即ち猪牙舟を葦葉に譬へたのだ。赤壁賦に縱一葦所往凌萬頃茫然といふのがある。古人は歩々清風生といった。さあこの時の達磨の氣持が、さあ南天棒てなければ知る人はあるまい。

缺齒達磨。前齒二枚かけたのがよう書いてある。菩提流支等に石を投付けられて、齒を折られたのだ。爲法不避危亡ぢや。嗚呼大慈大悲問答達磨。武帝對談の處ぢや。これは釋迦の華嚴會上にも比すべきで、如聾如啞てあつた。釋迦は第二に下つて阿含を說いたが、達磨は益〻高さに出てゝ大機の物を求めた。如來禪と祖師禪との相違は此處らかな。武帝問はば留守と答へよ秋の月。雪竇曰不知問天邊月。

面壁達磨。多くは後姿をかく。衲の歌に、面壁の祖師の姿は山城の、八幡畑の瓜か茄子か。瓜にもなる、茄子にもなる。仙崖のは揶揄一番して、そないに拗ずと此方向かしやんせ、あぢのはなしがあるわいな。宗旨のあることぢや。容易の看をなす勿れ。

坐禪達磨。前向ぢや。これが日常かく達磨ぢや。どうも達磨の畫は尋常の畫師否少々上手ても、何うも達磨に見えぬ。達磨を知らぬからだ、達磨になれぬからだ、坐禪を知らぬからだ。畫師も禪をやらぬと眞の境界が得られぬ。兆殿司、雪舟、近くは仙崖、何れも脫俗して居る。しかし金岡や、狩野、土佐家など、不知々々妙に入つたるは、一心不亂の結果て、禪と暗合したのだ。學びずと雖ども吾は學びたりと云はん。何事も我を忘れて一向專念に修して行けば、妙に入るを疑はぬ。遺敎經には、制心一處無事不成辨とある。元信は妙心て禪を修した。大悟して嬉しさの餘り書いた十牛圖が、今に妙心寺に遺つてをる。

絳衣達磨。赤い衣を頭から被つてをるのぢや。是は聖德太子が御衣を脫ぎ王ひ、餓人の死體を覆ひ玉ひたるに因すともいふ。魏少林は沍

寒の地なれば、此處にてもありし事ならん。まあ相は圓滿ぢや。圓滿無碍の心を以て書けば達磨になる。無念の念を念として、無相を相を畫とするこそ、正に畫の妙に入ると云ふべきか。

片岡達磨。餓人が蔦をかぶつて寢てゐる圖ぢや。白隱さんや、遂翁がよくかゝれた。偶々太子が片岡山で妙な飢人に遭うた。餓人直に、班鳩や富の小川のたえばこそ我大君の惠忘れず。太子も又、級照や片岡山の飯に飢ゑいねる旅人あはれおやなし。唯佛與佛乃能究盡の境界である。密室風を通さざる處がある。知音別在青山之外

達磨の種類は其他色々ありてかぞへきれぬ。碧巖にも、一二三四五六碧眼胡僧數不足とある。達磨が達磨のかずを知らぬとよ。かんばん達磨。煙草屋、經師屋に現はれたは何時の頃よりか。何處へでもよう面を出す人。眼玉の大きい處、人の印象をひく。廣告やの利用ぢや。

人が好いから何處へでも行く。鬚の達磨或庵は西天胡鬚因甚無鬚と揶揄した。僧あやしみ問うたら、餓狗喫繩纆と避げた。水庵はこの語を五百人の善知識の語とほめた。繩纆はぼろくずのことぢや。西天の胡鬚は達磨には何故鬚がないかと問うたのだ。ひげだらけの達磨ぢやに何故かういうた。こゝが八識頼耶の暗屈を打破する妙手段ぢや。參じて知るがよい。美人達磨さては女にまで化けたな。棚の達磨は緣起がよい。おもちや達磨は小兒がよろこぶ。ころんでもいつも起るを不倒翁とも名くとかや。普賢菩薩が江口の君と化けて、西行を濟度したこともあるから、上州などで草餅の事を達磨といふも一理あり。草餅は私窩子のこと、馬關では惣嫁といふとかや。とんだ所まで達磨が居る。達磨々々放てば手に滿つ豈一多のきはならんや。かたれば口に滿つ、縱横きはまりなし。それ其處にも此處にも左轉右轉受用不

盡。やれ〳〵達磨の數をかぞへよつたら、肩が凝つてきた。お茶でも一ぱいくれえ。

五、碧巖第一則提唱

達磨の事は何程でもつきはせぬ、吾宗の無盡藏ぢや。然し序に今一つ誰も能く知つてをる、碧巖第一則を簡單に提唱しよう。提唱とは這箇をば、さあ看よと提げ出すのぢや。意氣投合したら、其場で大悟する者がないともいへぬ。餘念を交へず、正受するがよい。其物を其物の通りに受け込むのぢや。三昧の譯が正受ぢやぞ。

舉梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義。磨云、廓然無聖。帝曰、對朕者誰。磨云、不識。

舉は舉示で、斯樣に示されたと記者の語ぢや。阿難が經の始めに、如是我聞と書いたと同じ事ぢや。乍去是は一應の義ぢや。實には舉の一字蓋天蓋地ぢや。舉揚すること如是。さあ見よ、鑑在機先ぢや。了の字を加へて、とつくに舉し了つたぞ。僅に如何と擬せば、遲八刻ぢやとなり。そんな見樣は南天棒の外にはあるまい、不見言七佛已前四時春。

梁武帝問達磨大師。這不咖嚕漢と圜悟が著語した。武帝許りではない、達磨の來たのも、雪竇の是に舉げたも、衲の眼から見れば、劍去久矣ぢや。すべて著語は勦絕底の眼で見ぬと分らぬぞ。先づ自己を勦絕してかゝれ。噂話ではだめぢやぞ。人々有光明在、元來問ふべき事があるかな。疑がふべき者かな。能求の心直に是所求の法ぢや。頭を以て求る頭ことはいらぬ。眼を以て眼が見らるゝ者でない。能求の心が直ちに菩提、直ちに法ぢや。心自ら心を知る者でない。古人曰く、求むれば轉遠く、去れば目前に在りと。これも修行の上のことよ。丸呑に

すると白隱親父に立枯禪と叱らるゝぞ。されど自分の者ぢや。氣がついたら遠慮はない。悟りに稅金はいらぬからなァー。

如何是聖諦第一義。是が四百餘州の大學者を集めて御前會議の結果として出た問題ぢや。聖とは耳口の王ぢや。一番偉らい事をさす。眞俗二諦をぽつこえた所ぢや。不落有無誰敢和の端的ぢや。四十九年一字不說で、釋迦と雖もよりつく事の出來ぬやつぢや。諦とは間違のない其物を指すの名ぢや。畢竟佛法ぎり〳〵、決極大安心の極則は何うぢやと聞いたのぢや。さあ斯う問はれたらどう應へるぞ。古人に與けて置く事てない。各自未生已前からの緊急問題てはないか。

速道速道。不會且達磨の答を看破せよ。

磨云廓然無聖。大事の答へぢや。十萬の波濤を越えてわざ〳〵來たのもこの一句故ぞ。古來この一句で、成佛作祖せし者數知れぬぞ。容易の看をなすまいぞ。まづ襟を正し端坐し、心を丹田下左掌の上に置いて、大工夫一番せよ。先師羅山も、廓然の著語に別無工夫とおいた。無工夫底の大工夫こそ眞の工夫ぞ。しかしこれきりて措いたら、皆が逃るてあらうから、聊か老婆を添へやうよ。

廓然とは、ぼがらかぱつきりぢや。然は意味を强うする文字ぢや。達磨はなんにもいはぬ。只々廓然廓然〳〵というて、天地四方をじろり〳〵と見まはした。廓然の聲は余程大きかつたらう。言猶在耳ぢや。看よこれが看えぬかと、武帝の方を睨みつけた。廓然の一聲は實に千古の暗を破る燈外の燈てあつたが、時熟せねば犬の前に眞珠ぢや。無聖の二字は蛇足ぢや。却て武帝の妄想をまさしめた。流石の達磨も、仕官千日失在一朝ぢや。丁寧損君德といふもこゝぢや。宗師家たる者の猛省せねばならぬ所ぢや。無聖の二字をいはなんだら、武帝も今

少し近づいて來たらうに。そこで南天棒は、可惜乎、可惜乎と著語しておいた。

帝云、對朕者誰。さあ武帝が取り損なうた。大事の大事の廓然の二字には重きをおかぬ。達磨の無聖は、絶對的に出てたるに氣がつかず、御前は聖はないといふが、今朕が面前に立つ御前は何者ぢや。非凡聖、非聖凡ぢや。なんにも無いとは云はさぬぞ。今喋舌たてはないかと詰り返した。狂狗逐塊ぢや。圜悟果然模索不著とつけた。おれの思ふ通り果して模索り得なかつた。しかし模索り得らるゝ者かいな、眼のつけ所が違ふと、何時までたつても果しはないぞ。驢年去といふはこゝぢや。曆の中には午のとしはあるが、驢馬の年は昔から無い。尋ても駄目よ。字の講釋は禪宗の禁物ぢやが、今は普及於一切を主とするから、忘醜て何も彼もぶちまけた。八幡の南天棒が笑うてをるだらう。いや棒めが時々夢に出て來るよ。

磨云、不識。知らんわい〳〵。なんと云つても知らんわい。定めて滿身に響く大きな聲で叫んだらう。言中有響ぢや。何も彼も勦絶した、大掃地の不識ぢや。是が終り初物ぢや。末後一句初到牢關ぢや。此不識が透過さへ出來れば百則はおろか、千七百則も一瀉千里ぢや。さあ試みになんとても問ひ來れ。只是不識ぢや。知らんわい。無意識のものが知りやうがない。知らぬから何ても出來るのぢや。諺に、知らぬが佛とはよくいうた。咄。知らんわい。臨濟の四料簡は奪の一字が字眼ぢや。不識はそれをも奪ふ。白雲はなんといつても未在と許さぬ。不識はそれをも奪うた。向一倍の力がある。衲の道得南天棒。道不得南天棒も、實はこの不識から脫化し來つたのだ。德山の道得三十棒。道不得三十棒は近因ぢや。淵源は不識ぢや。これが本當

に手に入れば、眞のおれが法子ぢや。さあ不識底即今出して見よ。エ
ー知らんわい。ぐず〳〵ぬかすと、この南天棒、手は見せぬぞ。
第一則は不識で仕舞ぢや。あとは雪竇の餘才で、達磨が武帝から去つ
た後の事跡を述べたのだ。しかし最後に闔國人去他亦不回といひた
い計りよ。往來のない、這箇の達磨を、見付けさせたいばかりよ。

六、白雲端の不識に向ての頌

一箭尋常落一鵰。更加一箭已相饒　尋常の弓の上手でも、一と矢で射落
すものを達磨ほどの者が、二の矢を射損じたは、さても笑止千萬な。
更加一箭とは二の矢を番うた處ぞ。相饒は添多也、おまけぢや。おま
けもよいが、お客樣が買はなんだ。
廓然は一の矢、不識は二の矢と知れ。
直歸小室峰前坐。二の矢を射損じたから、大愧かいて、魏の少林に引込
んだ。助けていへば不風流處也風流か。
梁王休言更去招。あなたは志公の狐に化されて、再び達磨を招ぶと宣
ふがさ、あなたを二の矢で射損じた者を招んだとて、なんの役に立ちま
せうぞ。何ぞ早く自己の達磨に相見せぬぞと、千古に托して座下の吾
〳〵の中堅を衝いた。南天著語して曰く。看看。
復云誰欲招。これぞ鬼の目に涙ぢや。どこかで悟るまい者でもない
と、打返して一句を垂れた。誰をか招く積りだ、達磨だらけの此世の中
ぢや。左之これ何ぞ。右之これ何ぞ。困眠。飢食。悲泣。時到死
死則腐。此外何物があらうぞ。達磨を外に求むるが氣の毒ぢや。水
にゐて渴と叫ぶと同じ事ぢや。又誰を呼べと。何奴が達磨を招ぶと
いふのか。この馬鹿野郎といふ氣味がある。ぐづ〳〵すると三尺の

南天棒が、りゆう〳〵と鳴つて居るぞ。

七、大燈國師は再來の達磨

大燈衆を集めて、不識に代て何といふぞと問うた。一僧云、與一掌弄物不知名と。又一僧は一喝す。又一僧は一踏踏倒。又云、咄。大燈云、我は打席一下せんと。まさか實際に天子は打てぬ。打てぬわけはない。法の爲めには天子もなんにもない。只度生のみぢや。されど向うが大根機でないと、功を知ることが出來ぬ。天子の前に禪を奉るものゝ心得ておくべきことぢや。大燈の打疊は達磨の不識と一器の水ぢや。達磨も武帝をしたゝか打ちたかつたらうが、未だ武帝が其境に達しないからやはり無駄骨ぢや。大燈の用意の周到なるを知るがよい。古來大燈は雲門の再來といふが、おれは達磨の再來ぢやというた。

八、衣を着ても狐なりけり

大綱和尚の歌に、

大方の世捨人には心せよ衣を着ても狐なりけり

今日本にこの狐が十七萬をる。眷屬を入れると五十萬匹は居るだらう。六千萬同胞のざつと百分の一ぢや。我等は何の因果で、この無用の長物を養はねばならぬのか。さてもお人よしの國民なる哉。昔有魔王一向佛發誓曰。他日入汝家著汝衣噇汝食學汝道說汝教以滅汝法と、坊主に化けて佛法を亡ぼすぞというた。丁度其通になつてをる。そこて佛は魔化作沙門とも、獅子身中虫ともいはれた。外からは手を付けられぬ要害を内から破る栗のいが哉。あゝ末法なる哉、慨嘆すべきことではないか。あの堂々たる建物の寺が、十七萬狐の棲處であると

思へば、高く聳えたる堂塔正に亡國の標本と見てもよからう。それに時々新に寺を建る馬鹿ものもある。建寺度僧總是無功德と、達磨はいうた。これには宗旨のあることぢやが、今は無功德でない、惡功德ぢや。惡功德と知りつゝ、布施をするやつは、布施を受くる坊主よりも施主檀越の方が先きに地獄へ落ちると、佛は說いてをる。とにかくたれか五百年間出の豪傑が出て、一刀兩斷に大革命をやらぬと、佛法は地を拂つて滅盡してしまうぞ。大燈滅後五百年ぢや、出なければならぬ時ぢや。いやこの南天棒が居れば氣遣ひはない。棒頭に奪命の神符あり。無生棒、神通無碍なり。魔外窺無門。佛祖退倒三千。咄。

九、禪は何うしても亡ぼされぬ

日本の佛敎は、十三宗四十派に分れて居るが、大抵は名相の佛法ぢや。藥の効能書ぢや。料理の献立ぢや。讀んだばかりでは病は直らぬ。食て見ねば甘味が知れぬ。佛は日夜數他寶無半錢分といひ、臨濟は、知是濟世藥表顯之說遂乃一時拋却即訪道參禪といひ、道元は其言靑其語未熟というてをる。獨り禪は佛法の總府として專ら實證を尊んで、虛名を避く。又これを佛法の實歸ともいふぢや。宗敎に生命を與へ光明を與ふる者、禪を除いて何物かある。今日各宗の紊亂は、實に目もあてられぬ。悉く皆名利の深坑に陷り、恰も餓狗の枯骨を爭ふが如きありさま、元來これ其宗に實力なきが爲てある。安心の大道を得る事は思ひもよらぬ。到底自滅を免れまい。亡びてももとで引きぢや。初より功能はないのだ。禪も通弊はあるが、流石に釋迦直傳の惰力て、何處かに光明が殘つてをる。しかし藥力不勝病力、道力不勝業力ともあり、社會の風潮にまきこまれて、心細くも次第々々に滅亡に近きつゝ

あるやうに思はるゝ。東嶺和尚は宗門無盡燈論に、譬如諸人夜在曠野行狂風暴雨吹滅提燈時有一人只恐燈滅以身左右擁護餘總不顧といつて御座る。我等はどうしてもこの那一人となりて、殘燈明滅の佛法を護持せねばならぬ。禪なくんば人なし。人なくんば國なしぢや。世は黑暗暗ぢや。これを忍ぶ可くんば、また何をか不忍やぢや。しかし衲がある間は禪は亡びはせぬ。禪は即衲なればなり。衲の菩提心は死せざるなり。南天棒は永久なり。禪は終に亡びざるなり。假令月可令熱日可令冷南天の願力は終に盡きざるなり。衆生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成。

十、法滅盡經の事

佛は正像末の三時を說いた。三時の年數は、古來紛々ぢやが、通途釋迦滅後正法千年。像法千年。末法萬年といつて居る。正法時代には、敎あり證あり。像法には、敎ありて證なし。末法には敎も證もない。惠心僧都が、京洛中を歩くとき、比丘尼の、俗人の女房のお伴して歩いてゐるのを見て、もはや末法に入つたなと知つたとのことぢや。釋迦が末法には、法が滅盡すると豫言しのだから、さうきまつてをれば別に修行する必要はない筈ぢやが、こゝに裏面に佛の大慈大悲のある所を推知しなければならぬ。勘當する兒はかはいゝからだ。改心を祈りてやまぬのぢや。勘當は親の慈悲ぢや。滅盡するぞと警覺せしめ、大に奮て佛法の興隆を計れよとの遺囑が、あり〳〵とすかして見える。元來時に正像末はあれども、人には正像末はない。人は元來無自性の者ぢやから、心一つで何んなにでもなる。されば回向文にも、冀佛祖垂照鑑、返末法於正法と唱へ出すことが出來る。立ちそむる志だにたゆまず

ば龍のあぎとの玉もとるべしぢや。此間も或居士が、法滅盡經のことを不審して來た。佛の大慈悲を誤解してはならぬぞ。昔家康が死に臨んで、諸子を集めて、おれが死んだら天下は何うなると問うた。時に家光進み出て、祖父上なくなり玉ひなば、天下亂れて如麻ならんといった。家康は悅んで瞑した。亂るゝといふは、警戒の意を含んでをる。治るといはゞ何によりて亂を防がん。滅盡經を讀んで落膽するには及ばぬ。前後際斷して勇猛に驀直進前、不悋惜身命に在り。澤水法語に爲勇猛、衆生成佛在一念、爲懈怠、衆生涅槃亘三祇。來れ天下の志士、乞ふ南天下に一團となれ。實所在近勉旃勉旃。

十一、中峯和尙座右銘

中峰の血滴々。これを誦して愧ぢざる者人に非るなり。實にこれ一個の照魔鏡で、坊主の內幕を暴露して餘蘊はない。その上懺悔後の方針を丁寧に指示してある。殺して活かすの法ぢや。衲は若い時から一日も佛前で讀まぬ日はないぞ。實に僧侶は勿論、居士においても、精神修養の大神咒である。大明咒である。しかしとかく坊主どもはこれを讀む事を嫌うてをる。これは親しくならねばだめだぞ。毎日讀む事を怠るな。（○點だけが本文ぢや）

末世比丘。形似沙門、心無慚愧。身著法衣、思染俗塵。口誦經典、意憶貪欲。畫耽名利、夜醉愛著。外表持戒、內爲密犯。常營世路、永忘出離。偏執妄想、既擲正智。何もかもさらけ出した。もう殘る者はない。道元曰く、如此懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀、發露白佛すべし。發露の力罪根を鎖殞せしむるなりと。猛省一番して、直に次下の信心ケ條を、骨に刻み肝に銘ぜよ。南天棒が拜むぞよ。

一、道心堅固須要見性
二、疑著話頭如咬生鐵
三、長坐蒲團莫著脇席
四、看佛祖語常自慚愧
五、戒體清淨莫穢身心
六、威儀寂靜莫恣暴亂
七、小語低聲莫好戲笑
八、雖尼無人信莫受人謗
九、常携茗帚拂堂舍塵
十、道行無倦莫飽飲食

道心大菩提心滿身道心見性在其中
道心堅固話頭自瓦解氷消
道心勇猛心忍力長坐不臥亦何厭
道心即懺悔心衆罪如霜露道心惠日能消除
道心直清淨戒體無道心無戒
道心相應寂靜八風吹不動
道心無笑閑呵々大笑別有宗旨
爲道心修道心道心親越信謗邊際
道心內外清淨理事不二當體全是
道心終始一貫飲食爲療形枯

この次の文句は無常觀と生死觀ぢや。一入身に徹みて難有いぞ。三業一致して明確に讀め。

生死事大。光陰如矢。無常迅速。時不待人。人身難受。今已受。佛法難聞。今已聞。此身向今生不度。向何處度此身。以上百七十三字、句句涙ぢや。言々血ぢや。拈南天棒曰、稽首中峰眞古佛。

十二、今の坊主は動機が違ふ

坊主になる動機は、菩提心より外はない。菩提心とは度衆生心である。つまり三界の大導師、四生の慈父となるのである。其期する處中々少小でない。昔覺鑁(眞言宗新義派開祖)八歳の時、初は親より偉い者はないと思うた。其親が領主へ頭を下げる。其領主が又勅使に頭を下げる。一日父に問ふ。勅使より偉い者があるかと。父曰、天子は一番尊い御方ぢやと。天子になれるかと問うた。我國ではどうしても天子にはなれぬと答へた。かれは號泣した。そは日本第一の人たらんと

思ひしに、天子にはなれぬと聞いて失望したからだ。時に僧あり、此兒の靈骨あるを見て曰く、汝泣くな、坊主になれ。宇宙第一の人たらん。一國の師はおろか、三界の大導師となるを得んと。かれは是に動機を得て直に僧となつて、遂に一宗の開祖となつた。今のやつは期する所がちがふ。食へぬやつが不得止頭を剃る。都合が可ければいつても還俗する。でも坊主といふのぢや。又寺を持ち、はたらかずに食ふ爲になるのもある。又世を厭ひ官をやめて坊主になるのもある。意氣地のない事ぢや。叢林に掛錫するは住職になる履歴とりて、修行のためではない。又公案を澤山覺えるのは、僞性のお師家樣になつて、老師老師と尊ばれたい勝他の心より外はない。要するに名利より外に物はない。此大切な清淨法身を、名利の奴隷となすはいかにも淺ましきことではないか。自卑而被人卑で、三界の大導師が、幇間擊柝の類と同一視され、長袖能舞ふなど嘲けらるゝに至りては、泣くより外の事はない。故楠田不識居士はいうた。少くも大學卒業位の者を小僧から仕上げたいとて、内々學士の新發智を募りよつたが、惜いかな半途にして死んだ。坊主になる動機が違うから、偉い坊主が出來やうがない。古人曰、發心不正萬行空施と。猛省せよ、猛省せよ。

先年文部大臣は管長連を呼出し、僧侶の執るべき方針を指示し、且宗教界の紊亂を摘發し說諭した。これに對して何も四莚を驚かす說を吐く者一人もなかつた。木偶人の如く、唯命是從うて居つたと聞く。耶蘇連が少々說いたげな。此方こそ說かねばならぬ身が、反て役人から說諭をくふとは、實に世は逆さまだ。古人の所謂冠を履にしけるものではあるまいか。おまけに西洋料理の御馳走にナフキンをしらばくれて取て歸つた連中があつたとかや。實に沙汰の限りである。宗教

が亂れざらんとするも豈に得べけんやぢや。これもと入道の動機が惡いのと、正師の無きに座するには違ひないが、鉗鎚其法宜きを得ば、强ちに偉人を作り出すことがないともいへぬ。涙ある者は涙ある者を作る。栴檀林を行けば其衣自ら香し。必竟師家に菩提心の涙がないからだ。學人は材木の樣な者、師家は良匠の如き者、少々木が曲つてをつても、大工の工夫によりて役にたゝするではないか。師家の涙一つでどんな惡い坊主も作れる。つまり今日の紊亂は、動機の惡いのと、正師のないことを證して餘りありだ。惠心僧都も、始めは名利から入つた。紫衣が着たい、信施を多く貰いたい、學者になり名譽が得たい計りであつた。ある日紫衣を著て金を携へて慈母に見えた、母は泣いて諫めた。そんなことで御前を坊主にしたのではないといふた。彼は深く感激して、遂に眞の坊主となつた。彼の歌に、世を渡る道と思ひてふみみしに誠の道に入るぞうれしき。又何故にかくはなりしと折々は姿に恥ぢよ墨染の袖と。惠心僧都ばかりにあづけ置くとてないぞ。ちと頭を撫て考へて見るがよい。往生要集は惠心僧都の作てある。坊主計りではない、居士も入道の士ぢや。度生を基礎とせぬ道は皆虛僞ぢや。人格も、品位も、金も、學文も、位置も、皆汚らはしき者となるぞ。それを尊くし、活かす者は菩提心ぢや。何事も世に手向ける、衆生に回向することを忘れてはならぬ。但し出家は出家の出家て、居士は在家の出家ぢや。家とは五欲をさす。坊主にして廉恥心がなければ、出家の在家といはねばならぬ。ともかくも專門の出家に及びやうはないのだ。今は其僧が、居士白衣の說法を聽くやうになつて居る。これは釋尊の豫言に、末世の比丘蓄妻妾ことと、白衣の說法を聽くといふのが出てをる。預言にはいつもうらがある。それを好い氣になつて、その

通りにやつてをる、慚愧々々。古人のいうた、出家の功徳といふ者を知るがよい。道元曰く、盧居士はすでに親を辭して祖となる、(六祖大師のことぢや)出家の功徳なり。龐居士は寶をすてゝ塵をすてず、至愚なりといふべし。盧公の道力と龐公が稽古と比類にたらず。あきらかなるはかならず出家す。くらきは家にをはる。黒業の因緣なりと。出家の功德廣大なるを知れ。棄恩入無爲是名大報恩とある。三寶の種子を絶えざらしむる者は、眞の出家にあるぞ。三寶なければ世は黒暗暗ぢや。南天下にも眞の出家が一人もない、俗より出でゝ俗よりも俗なりの奴ばかりだ。どうして佛祖の深恩に報い奉ることが出來やうか。居士には澤山可いやつがをる。この居士の手に依てても眞の出家が作りたい。居士計りては佛祖への申譯がたゝぬ、どうしても一匹位は納僧を打出せねば、南天棒の一分がたゝぬ。これと同時に、これから坊主になるには其動機といふ者を明かにし、試驗してならするがよいぞ。釋尊當時は五種不男は坊主になることを許さなんだ。この宗教界を玩弄物にして、佛祖の面に泥を塗るなよ。他時異日莫道不言と至禱至禱。

十三、南天棒は日蓮が好き

南天棒は日蓮主義ぢや。かれの教理はともかく、かれが不撓不屈剛毅の心が好きだ。これもやはり禪に居て、禪天魔を唱へて、折伏を面にしてをるから、鎌倉禪ぢやの、とび〳〵禪ぢや、めくら禪、立枯禪ぢやのと、いろ〳〵惡口をいふ。人或は南天棒を自讃毀他を犯す者と罵る。しかし目下日本に佛祖の正傳を得た者がおれより外にあるか。無いからないといふのだ。相似の禪はどし〳〵打ち碎ねば、紫の爲めに朱を奪

はれ、玉石混淆して學人の歸する處を知らぬ。これをしも自讃毀他といふか。不動明王のうらには、愛染明王ぢや。慈悲の殺生は菩薩の萬行に勝る萬々ぢや。惡口もいへる者ならいうて見よ。人の嫌がることをいふのだもの、慈悲心がなければいへる者てない。棒頭の涙は知る人が知るぢや。釋迦も隨分惡口をいうた、聲聞を狐癬の虫ぢやといひ、無慚愧の僧を、蝙蝠僧、啞羊僧など呼んだ。

日蓮はおれの氣に入つた坊主ぢや。龍の口や、佐渡島あたりで、執刀杖尋斷々々壞や、數々難をとなへて、寂然不動なりしは、敬服の外はない。建長寺で典座をしたといふから、ちつとは坐禪もやつたらうが、無論十成ではなかつたに違ひない。四個格言の中、禪天魔だけは憚てをつたが、大覺禪師に呵られて加へた者ぢやとのこと。なるほど析伏門て掃蕩をしたは可いが、又一重、題目といふ邪魔ものを脊負はしたから、かれも亦龍頭蛇尾の漢たるを免れぬ。しかし其勇氣に至つては、衲の取て學ぶ所てある。

十四、南天棒の自贊付り臨濟遷化話

衲の肖像は、六年前に東京の内田鐵針といふ、羅漢書きの名人に、澤山書かして、おれが自贊して、形見がはりに久參の居士に度與した。

自贊

横拈倒用南天棒。鏖打宗門相似禪。千古醜容得人惡。一燈吹滅瞎驢邊。

横拈倒用は自由自在の意ぢや。南天棒の三字は、どの詩にも入らぬのはない、宗旨のあることぢや。この棒に自性がないから、何にでもなる。東家爲馬西家爲驢ぢや。僞山ぢやないが、門前の百姓家の水牯牛と生

まるゝことも譯はない。千七百則の公案、乃至森羅萬像、只この一個の南天棒頭より湧出して、受用不盡てあるぞ。さればあるときは相似禪を鏖にする罰棒ともなれば、有功者の爲めには賞棒ともなる。一々壁立萬仞ぢや。しかし無駄には棒は揮らぬぞ。

臨濟臨遷化云。吾滅後不得滅却吾正法眼藏(息を引きとるまても說法してをる、あゝ難有い)。三聖出云爭敢滅却和尙正法眼藏(父子唱和)臨濟云、已後有人問爾向他道什麼(いつまても親は三つ子のやうに思うて)三聖便喝(大冶精金無變色)濟云誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅却(從上諸祖亦復如是善護持せよといふに同じ、印可證明ぢや)。

自贊の結句は臨濟より脫化し來つた。臨濟の生膽は三聖めが吸ひとつたが、南天棒の生膽を吸ふものは抑誰ぞ。

十五、白隱の自贊

千佛場中爲千佛嫌。群魔隊裡爲群魔憎。挫今時默照邪黨。鏖近代斷無瞎僧。這般醜惡破老禿。醜上添醜又一層。

衲の意を得た贊ぢや。やはり鏖の字が入つてをる。白隱も惡口は上手であつた。醜惡の二字も衲と一致ぢや。君子は千里同風ぢや。

十六、正受老人の自贊

這老大生。太煞顴頂。舉國僉言。無分曉漢。

これもよい。太煞は甚だとよむ。煞は殺の古字ぢや。顴頂は大面さげて何事も頓着しない、洒脫々々然たる處なり。結句無分曉、ちから有り餘る。恐ろしや〳〵〳〵。どうもこの無分曉漢には容易になれぬぞ。

兼中到の境界よ。科頭箕踞長松下。白眼看他世上人。看他の他は助字なり。

十七、愚堂國師自賛

愚堂の自賛は人の請ひに任せて十個ある。何れもよいが、其中の一つを擧げん。

強將幻質畫成圖。對面分明作兩軀。我道縱雖千萬箇。有形畢竟不如無。

結句。不如無は雲門より脱化し來る、妙々。寢てもゆめ起きてもゆめの世の中を、ゆめと知ねば夢はさめけり。なんの理屈がいる者か。只これてよいのよ。しかし胡椒丸呑は禪家の禁物ぢや。引き寄せて結べば芝の庵哉とけねど本の野原なりけり。とくればととけねどの間、毫釐千里ぢや。析空(小乘)體空(大乘)の分るゝ處。修して知るがよい。とにかくこの生肉團が邪魔になる。邪魔になる物でない。邪魔にするにも及ばぬはずぢやに、無繩自縛ぞあはれなり。拈南天棒云百雜碎。

十八、死んで何處へ行く付り七賢女の事

地獄へなりと極樂へなりと、行きたい處へ勝手に行け、おれの與り知る處ではないわい。これは室内の法戰て極ることぢや。天機は且く洩らされぬ。骨折たらしれる。しかしこのおれの知る所てないといふのが字眼ぢや。おれといふ者は船頭のよな者ぢや。向無理會處究來究去。死後歷然鏡にかけて見る如し。

身心は、元來不二なる者なれども、妄想が二つに見る。體は死んても心は死なぬといふ、印度九十六種外道の見解、大抵さうぢや。耶蘇なども

この類ぢや。身は船、心は船頭。船は壊れても船頭は何時までも生きて居る。又他の船に乗りかへる。心常相滅とて、昔は勢力のあつた學説である。釋迦十二年苦修、最後曉星を見て大悟した。始めて身心不二なることを知つた。そして心常相滅の妄見にして、人をあやまることを看破し、心性大總相の法門を説いて、千古の迷夢を覺破した。三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別。と説いた。有形。無形。悉く一心の中に歸納した。心さへ明かなれば過、現、未、三世通達の眼を得と説いた。さらば修行の要點は、只此心何物ぞと參ずるのみである。二祖立雪斷臂云。弟子心未安乞師安心。達磨云。將心來與汝安。二祖云。求心不可得。磨云。爲汝安心竟。一心の不可得なることが手に入れば、身心不二なることが、分つてくる。不可得の中から、この世界の森羅萬像が起つてくるのぢやから、死後の成行など分らぬ筈がない。故に曰く、六道四生遊戯三昧ならんとある。かうくればよいが、さて眼光落地の時に臨んで、狼狽せぬやうに、しつかり骨折つておくがよいぞ。

昔有七賢女。一女屍をさして曰く、屍在這裡。人向甚處去。中に一姉あり、曰く。作麼々々。何を吐すと睨み据ゑた。屍の時と、人の時とを、混同してはならぬ。薪化して灰となると思ふは迷なり。薪は薪の法位、灰は灰の法位に住して、前際後際を絶してをる。餘習が盡ぬから、灰の時、薪の時を入れんとあせる。實は即時に解脱して、迹を留ぬ者である。人は天地一枚の人。屍は蓋天蓋地の屍なり。人の上に前後なく、屍の上に前後なし。只其人となり、其屍となりてこそ疑ふ餘地がなくなる。噂話では所詮あかぬよ。古人曰。紅顏自在童子時。白髮今在老體身。若き時の色形は、其時さり失せり。老體の身は、今新に得たり。

若い者が年寄になつたと思ふは誤りなり。其故は、年よりて若い中の證據が何處かに殘つて居るか。今の時は今の時のもの、昔の時の物てはない。物を見て時を見ざる故に、この過生ず。あに今昔といはんや。昨日の我は昨日に落射し、今日の身はすてに昨日の身にあらず。微細に論ずれば、時々刻々に變遷して行く。今日がおれの生れた日ぢや、おれより若い人はあるまい。世の中は今日より外はなかりけり、昨はすぎつあすはしられずぢや。昔梵志あり。若くして他國に行き、年たけて故郷へ歸る。里人昔の人來れるやといへば、梵志は、私は昔の人にあらず、昔の人に似たるのみと答ふ。この理一寸合點し難し。三世不可得が手に入らぬと分らぬ。時間の無自性なることが分らねば、口になんぼ說いても實際分つてはをらぬ。金剛經には、この處を、應無所住而生其心といつてある。この處が合點がいかぬと、名は佛敎信徒でも、心は耶蘇ぢや。外道ぢや。そは身の外に心を求むればなり。靈魂を肉體の外に認むればなり。釋迦の出世は、只この邪見、即ち、心常相滅を破せんがためのみなることを忘れてはならぬ。人の迷根はこの妄見に因するを知つて、お互に身心不二の境界に修してゆかねばならぬぞ。衲は乍入叢林の學人には、必ず長沙の頌を書いて遣る。學道之人不識眞。只爲認從前識神。無量刼來生死本。癡人喚爲本來人と。この中の識神とは、魂のことぢや。何か身體の中に主宰すべきかたまりが何處かにあるやうに思ふ。それが却て生死即迷の根本なることを、知れよとなり。其識神は本來ない者ぢやが、それを何處かにかある者と固執して、其始末に苦むのぢや。この妄念をさへ打破しなば、即得解脫で、邪魔物がなくなるから、浮世の空にかゝる雲なしで、脫洒自在に世に立つ事が出來る。これを身心脫落といふのぢや。禪は只管打坐して此

境に打ち入るが目的である。本來人とは悟れる人のことぢや。さとりをとり違へるととんだことになるぞ。一皮々々むくやつを、却つて一かはくつつけて、これが悟りぢやと、馬鹿者どもが思つて苦しむ。認レ賊爲レ子ぢや。淺ましきことぢや。

作麼作麼とは、佛の道を信ずる程のものが、なぜそんな外道のやうな問ひを發するぞと叱咤する氣味がある。なぜ與麼(如是)に見ぬか。汝が指す者是何ぞ。看よ看よといはん計りなり。禪語に、道什麼といふ語がある、嚴肅い語ぢや。何をぬかすぞと響く。參じて知るがよい。

七賢女の席に、帝釋天が居て、この作麼々々の四字で悟つた。嘻しさの餘り、何か供養したいと申し出た。處が、賢女の要求が面白い。女曰く、我家には何てもある。唯欲い物三つある。第一無根樹一株。第二無陰陽地一片、陰陽のない土地ぢや。第三叫不レ響山谷が一所と。以上皆無いものぢや。さすが物持の帝釋も、これだけは御免と斷つた。賢女は直突込んだ。汝若無此物如何得濟人と。何故か。這箇の三品は身心脱落の當體なり。胸に一物があつては、人を容ることが出來ぬ。須く心を空うして、人を接せよ。人皆我に來たらん。不見言河海不擇細流故大也と。禪は前後際斷てある。地限塲限てある。地限塲限といふ語は、白隱の常に垂示された語で、安心の秘訣てある。元來其地限り、其塲限りの者ぢや。物々全眞、事々解脱の意ぢや。

生也全機現、死也全機現。死んで何處へ行く。何物が行く。行く者は誰ぞと參ずべし。生にきけ、生になれ。死にきけ、死になりきれ。死後は死後が一番よう知つてをる。この身心が邪魔をする。一度身心脱落せば、三世不可得の境が手に入る。生死は自在にゆく、生死は元來時間の變化なればなり。只即今如何と工夫すべし、身心不二なるを知ら

ん。古今同時遠近一如なるを知り、大自在の境界を得ん。但し因果を撥無してはならぬ。古人も、從來把本修行、不敢撥棄因果というた。全機現の因果、因果の全機現を看取せよ。

十九、唯因果無人

大論の中にある金口ぢや。因果論は佛家の定說ぢやが、中々合點がゆかぬ。それは因果と自己と別々になるからだ。因果がどうしても自分の者にならぬ。噂話になる。因果を了知せんとせば、自己を忘じて因果其物になりきらねばならぬ。衲も若い時から因果のことは骨折て研究した。中々說明が出來にくい。元來宇宙は因果の支配によらぬ者はない。人及び萬般の現象は、因果の影法師にして、因果は其本位である。衲が居士島田は、天下は因果の大博覽會というた。天地萬有は決して實體ある者でない。因緣假和合の者ぢや。畢竟空なる者である。空とは何にも無い事ではない。虛空のよく萬有を容るゝ所より名を得たので、無限廣大、無碍自在を意味し、而も其中自から一定不變の法則ありて、微塵許りの相違もない。即ち因果の法則である。この法則に順ずれば、自然に適合するから、生活が安穩である。これに違へば苦惱忽ち生ず。因果は正直と無私をも意味す。

大燈國師も以佛祖不傳之妙道不掛在胸間、忽撥無因果、眞風墜地、皆是邪魔種族と宣うた。佛祖不傳之妙道とは、大修行底と、深信因果の一致を指すぞ。因果を撥無すれば、佛道も禪もない。人生は黑暗暗ぢや。今の禪者に因果のことを問ふと、知ぬもの計りだ。相濟まぬことぢや。國師の罪人ではないか。

さてこの五字は實に大切で、唯因果の三字と、無人の二字に著目するが

よい。唯とは餘緣をからずというて、更に外の物がまじつてをらぬ、純粹の者をさす。其物それぎりぢや。たとへば、趙州の無字唯擧せよの唯ぢや。禪の極意は唯の一字にあるぞ。唯は單也。純粹也。無餘念也。一枚也。因果の時は因果になるのみぢや。唯はのみとも意味す、因果本位ぢや。因果より外に物はない。自己の身心を脫落して因果になるのぢや。いや、なる者もならする者もないが、且く修行邊に約していふまでぢや。無始以來の因果ぢや。どこも因果ぢや。何時も因果ぢや。其間自己を求むるも不可得ぢや。只因果のみありて其外なにもない。金不博金ぢや。水の上に更に水を來す事は出來ぬ。そこで唯因果ぢや。其間無人ぢや。人をおくと因果と別々になる。人本位にして、因果が向うに立つ。離れ離れになる。生木を裂く樣なもの。元來一つの者を二つに引き裂うとするから、苦しむ許りて、出來る筈がない。この身體が丸ごて因果の當體てある。因果本位て、自己は何んにもない。世を渡る秘訣は、己を空しうして、因果に任ずるにあるぢや。地限りといふも、己のないことぢや。塲限りといふも、因果に任せて、私のないことぢや。强ひて私の分別を入るゝから、自由が妨げらるゝ。生死も因果の支配に任せて、私心を沒却したら、大安心て笑つて瞑することが出來る。彌陀如來に、無理の注文を頼はす要は微塵も無い。全體種をまかずによい處へ行かうといふのは、無理の注文ぢや。彌陀をべてんにかけるのぢや。眞宗は撥無因果ぢやないか。一考を要する所ぢや。因果は歷然たる者ぢや。微塵ばかりも昧ますことは出來ぬ。不見云天網恢々疎而不漏。猛省せよ。猛省せよ。

乾坤無地卓孤筇。無錐無地ぢや。唯因果にして人なしぢや。孤筇は一本の杖ぢや。宇宙は因果三昧ぢや。大地無寸土。東海道人子一人

もない。畢竟空ぢや。只管打坐ぢや。身心脱落ぢや。直にこれ因果となりて活動せるのみぢや。

且喜人空法亦空。われはわれの空なるを知ると同時に、われに對する萬境も、共に空にして、實體なき者なることを知るの嬉しさよ。さらば何物が生るゝ。何物が死ぬる。衲は知らぬ。因果殿に問へ。問ふ者が直に因果ぢや。さらば水に入て渴を叫ぶの愚か。さても我は因果の影法師なるかな。臨濟は人境俱奪の境界というた。其上から出た不俱奪は、因果歴然を指た者ぢや。獅子尊者曰。身非我有況頭と。

珍重大元三尺劍。さあ何時死んてもよいぞ。自己を忘ずれば因果のみぢや。切つても切れぬ、死んても死なぬ。何時も御無事の因果殿。いやそりや實は衲のことぢや。弄物不知名と呵るなよ。三尺の劍は即無常の殺鬼ぢや。つねに我等が、頭上に閃めけり。覺悟はよいか。

因果無人ぢやと。珍重して頂戴します。何時でも入らつしやい。是は佛光國師の元兵に迫まられた時の頌ぢや。この冲天の意氣に敵することが出來きぬと見えて、首を斬らずに去つた。日本に來て時宗を度した人だ。雪江は元に捕はれ、やはり此頌て助かつた。威力ある頌てある。

電光影裏截春風。しかし實地に臨むとさうはいかぬ。平生修禪の必要ある處ぢや。痕がつく。露が滴るものよ。電光春風の境界。大難大難。大燈は斬られんとした時、限りある身の誠ためさんというた。道灌は、かゝる時さこそ命の惜しからめ、兼てなき身と思ひしらずば、というて死んだ。各自自己を忘るゝ迄は、因果論は且くお預り。拈南天棒曰這箇蹔と。因果無人。見えたか見えたか。擬議せば、三十棒。

二十、人が犬に生れるか

勿論犬にもなる。佛にもなる。此自由身を受けたを悦ばねばならぬぞ。人が犬に生るゝ、又犬が人に生るゝといふ事は、古來いふ事ぢやが、常見のある者には、とても合點がゆかぬ。まあ己を空うして說く所を聞け。然し普通の學者は、直ぐに妄誕取るに足らざる者として、一顧だもせぬ。所謂食はず嫌ひには手の付け樣がない。南天も若い時は、やはりこの類ぢやつた。俗人ならいざ知らず、坊主にして左樣な不公平な精神があつてはならぬ。これが所謂撥無因果ぢや。元來修行は、斷常二見を打破して、正見に安住するのが目的である。斷見とは因果應報を無みし、神佛を無みし、死なばそれ限り、何にも無くなる。惡いことは仕どく、善いことは仕損ぢや。常見は、人は人に生れ畜生は畜生に生

れ、人が犬になるといふ事も、犬が人となるといふ樣な變化はない者ぢやと、鑄型に嵌め樣としてをる。正見とは己を捨てゝ、因果歷然の儘に任じ、疑ひなく世に立つのぢや。既に前項にいふ如く、因果無人とは、人に自性なき者たることを知らば、なにも犬になるのを怪しむことはいらぬ。其代り上つて佛菩薩にもなれる自由がある。犬になれねば、佛にもなれぬ道理ぢや。心猶如巧畫師能作種々五蘊とある。人心は自在の者、五蘊とは色受想行識ぢや。色は物、餘の四は心ぢや。蘊は集むる者でない。五つが和合つて、いろ〳〵の人や物が出來る。始より實體あるぢや。五つの組立具合に因て、犬にもなる。人にもなる。佛にもなる。宇宙はとろ一枚の水と見ればよい。一切の現象は、水の上の波ぢや、水を離れて波はない。人波もある、犬波もある、佛波もある、十界波に分つてある。心海を離れて波はない。波は風により起る、風は即

因ぢや。人の死は波の靜つて水に歸するが如き者て、一旦靜つても風が吹けば又生ずる。生生死々、限りはない。風の吹廻しに因て、大波あり、小波あり、美波あり、醜波あり。船を渡す波ともなり、船を覆へす波ともなる。和歌の浦では、片追の波ともなる。種々無量の形を現ずるぢや。雲門は清波無透路というて、佛法の全體を說明した。水に自性がないから、方圓の器に從ふ。人々我執の起せぬ處ぢや。此水の譬で大體を悟るがよい。理屈位は知つて居ぬと、佛々所生身の一分たつまい。實際手に入るゝとは、修して自知するより外はない。大風には大波ある如く、因の樣に果がなるから、善因あれば必ず善果、惡因あれば必ず惡果ぢや。地獄がいやなら、善いことをすればよい。天堂に上りたけりや、惡い事をせぬがよい。然るをいたづらに彌陀やゴットの本願や救ひを有難がつて、何時しかへそくり金をしぼりあげられ、死の將に至らんとする時、平生の悅びは却て苦惱を增す因となり、天魔波旬に魅られて、お先眞暗て、斷末魔の苦みで悶死に終る、比々皆然らざるはない。因なくして果を貪るは、佛法中の外道てある。猥りに依賴心を起さしめて、世の進路を害ふ、罪何人にありや。惡いことをしたら、さつさと地獄へ行くがよい。これが佛法ぢや。諂はず貪らず、因果に安住する所に淨土があるのよ。提婆が地獄に入るを、佛勅により阿難が見舞に行つたら、提婆は笑つて曰く、歸て釋迦に云へ。衲が此焦熱地獄に居るのは、三禪天の夕涼よりも安樂なり、決して心配あるなといへと。阿難ではまだ提婆の境界が分らぬ。提婆はもと阿私仙人て、曾て釋迦に法華を說て、天王如來の記莂ある人。其度量の大いなる、十大弟子の及ぶ所でない。因果歷然の標本になつて、佛に敵對ひ、生ながら地獄に落ちて見せた。されば謠ひにも、提婆の惡も、觀音の慈悲といふとがある。俱舍

には菩提薩多利物爲懷、爲化有情必往惡趣とある。賽の河原の地藏尊を見ても分るだらう。彼猥りに後生をねがふ、撥無因果の徒と同日の論でない。しかし地獄の中でも、菩提心さへあれば、任期が滿ちたら、又極樂に遊んで、佛の敎化を助くる時節も來る。なんと自由の身ではないか。咄。即今如何。自己ありや。身心ありや。只這箇是のみ。犬になりとも、佛になりとも行きたい所へ行くがよい。不見言自携瓶去買村酒。還來著彩爲主人。

二十一、因果律

欲知過去因見現在果。欲知未來果見現在因。是て因果の理法を說盡した。善惡業報三世因果は、是非とも信ぜねばならぬ。之がなければ、禪は亡びて仕舞のだ。諄い樣ぢやが、今少々やる。驅耕夫之牛奪飢人之食。一不做二不休。毒喰はゞ皿までが、禪者の遣りくちぢや。佛は是を了義經と名けた。有始全終をいふ。南天下は根柢を盡さねば息まぬ。盡の字は字眼ぢや。故に曰く、高々山頂立。深々海底行ぢや。因果の事も半途にして措いたら、萬刧浮ぶ瀨はないぞ。因果の事は十分研究して、遺算なき所までやつておきたい。因果にならぬと、因果は分らぬ。無人といふ思想がないと、因果律は分らぬ。人が犬になる事があやしく見えるやうでは、とても成佛は覺束ないぞ。果の時すでに因はない。因の丸ごてが、緣の助力を得て果に移り、果と名をかへた。時は違ふが、物は同じ。只それが緣により增大してをる許りだ。始の因の時を求むるも、もはや不可得ぢや。柿の種子から柿の木が出來る。木になつて原の種子を探がしても得られぬ。皆木の中に融合して、果となつて來てをる。玆、が因果律の要處で、因が果にまるごて移つてを

るから、果を見たら因がすぐ其處に來て居る。懲役に行てをるのを見たら、泥棒したことは見ずとも、それが直に果となつて來てをるから、其果を見れば、泥棒したことがすぐに知れる。因の場合を求めてももは や落謝し去つて痕迹もない。果を見るより外に證據はない。名はなんとかへても、柿の種子は必ず柿の木になつてをる。すでに果に因て因が知れる者とすれば、因を見て果を知ることは、智者を俟たずして明かである。惡事をして惡果をうくるに定つたなら、改心して善事(因)をして善果を得やうといふ思想はどうしても起らざるを得ぬ。苦を好むものは問はぬ。苟も厭苦欣樂の理想があれば、小惡と雖も出來ぬ筈ぢや。小善といへども爲さねばならぬ。因果歴然として一微塵も相違なき者である。七佛の通誡が其處から出た。諸惡莫作。諸惡は莫作と現成した。因果歴然たればなり。衆善は奉行と現成した。而も自淨其意でなければ、器械的になる。無人因果でなければ、是諸佛敎とゆかぬ。自淨とは、無我である。無人である。自己を忘ずるのである。禪と敎とは自淨の先後が違ふ。禪ではこれを先決問題にし、敎では後決問題としてをる。了じつゝ行ふ、燈を以て夜行くが如し。了ぜずして行ふ、燈なくして夜行く如し。危險なり。自由の分がない。況んや、暗中手搜りで行かば、半途にして疲勞を來し、久しさに堪へずして息まん。善いことは眞似てもよいが、人形的器械的で、猿が猿芝居をする樣な者ぢや。善惡の無自性なる當體が分らぬと、自由の分がない。戒體即無相といふ眞境界を得ることが出來ぬ。夢に金を拾うた樣な者ぢや。覺ては失望に終るのみぢや。達磨曰、有爲之善、生天因。譬如矢放天力盡矢先落と。只須く根源に透入し、自淨其意身となれ。因果其物になれ。因果の事はまだ〳〵あるが、ざつと此邊で分つたらう。餘は

只グッく〳〵と兀地に打坐して、身心脱落なれ。さらばいつかは因果其物に築著磕著して、不思拍手大笑するの好時節あらん。至禱々々。

二十二、大乘盛んなるは法滅盡の徴

これは天台大師の語ぢや。如淨や道元さんも、天台の書は讀めと仰せられた。中々よい誡ぢや。今時小乘宗はない。法相三論の權大乘も形ばかりぢや。多くは極大乘で、一超直入如來地の禪や、一彈指の間に極樂往生が出來る眞宗、さては娑婆即寂光の日蓮、阿字本不生、即身成佛の眞言など、都合よくは出來てをるが、空腹高心では體が動かぬ。腹が減つては戰が出來ぬ。旅費がなければ心は矢竹に早れども、行くに行かれぬ十萬億土。夢ならば早く覺めよかし。學んで思はざれば罔く思うて學ばざれば殆し。希望熱ばかり高くなつて、實地の經驗がない。

さあ最後の戰となると、敵にも多くの伏兵がある。總退却の止むを得ざるに出てねばならぬ。もはや援軍も求むるに由なし。重圍に陷りて軍門に肉袒せねばならぬ。地獄の捕虜とならねばならぬ。聞即信、平生業成などゝいうて醉信してをるが、さあ臨終となると先眞暗で、顧れば罪は多く、德は少し。唯除五逆誹謗正法の除外例も恐しくなつて來た。とかくに大乘の法門は、云ふ事は高尙いが、希望熱にうかされて、戒律を無みする傾きがある。機の深心の弊であらうが、これを破大乘といふぢや。後生大事や、金ほしや、死んでも命のある樣に。眞宗坊主て犯罪の統計が中々多い。名古屋の黑田某の殺人罪は、中々有名の者ぢや。其類はまだ澤山ある。美人献上の滑稽談も出る。本山の勸學どのが多くは罪人ぢやつた。眞宗坊主は土橋の土よ、人を渡して、身は落ちる。これなら至極よいが、人も渡さず身も落ちるぢや。禪の方

ても、古徳の垂示にもいたく破大乗を戒めてをらるゝ。白隱が十重禁の公案をおかれたは、大いに意味のある所ぢや。禪の決極は忠孝の二字にありとまで煎詰めた人もある。近頃は大分戒が衰へた。偶々やつても形式だけで、授戒中に罪を犯す者が多い。近頃東京の北野元峰師が、古風な授戒をやつたといふ事ぢや。悦ばしいことぢや。禪は佛法中の佛法、宗教中の宗教で、すべての宗教に生命と光明とを與ふる本源ではないか。すべてを大菩提心の大網に包容しようといふのが、其期する處で、凡て行動もこれに順ぜねばなるまい。唯戒の神聖さへ持つてゆかるれば、此難は免るゝことが出來る。戒がなければ禪は一日も無いのである。天台の語を見て猛省一番してもらいたい。尤も天台の語にも表裏がある。法滅盡經を佛が說かれたと同じこと、破大乗を警誡されたのだ。百丈野狐の話は畢竟この弊を誡めたのだ。一方に大修行底の極大乗を說くと同時に、深信因果をすゝめて、破大乗を誡められた。不落因果は破大乗ぢや。不昧因果も口先計りでは、やはり同樣ぢや。無門も兩采一采というて居る。どちらにしても眞實がなければ五百生野狐身ぢや。前百丈はしかも御師家樣ぢや。殷鑑不遠ぢや。名利のために野狐禪をうると、尻に尾が生えるは目前だぞ。この話の精神はいつもいふ通り、大修行底と深信因果にあるので、室內で狐の眞似などする場合でない。黃檗は何を一掌した。破大乗を殺せといふのだ。古歌にも、不落にて野狐になつたるとがの上に、不昧で落つる二度のあやまち。どうしても戒ぢや。戒なくんば禪なしぢや。大乗頓大などの名に捉へられて、地獄の因を結ぶ勿れ。不見言貪看天上月失却掌中珠。

二十三、鐵舟と宗演

宗演も中々賣り出した。引ばり凧の樣に、全國を巡錫してをる。演說は大分うまいさうだ。學問や理屈で行くものなら、古人が二十年三十年只管打坐はせぬ。靈雲桃花を見て何を悟つた。理屈が入用があらうか。香嚴は竹の音を聞て大悟した。潙山を拜してどういつた。我不尊潙山道二十年爲我尊不說破といつた。禪宗の修行は、百合の皮をむくやうなものぢや。從前の惡知惡覺とて、學問や理屈のかたまりを、一皮々々剝いてゆくのが、室內のしらべぢや。轉悟れば轉捨てゝ行かねばならぬ。剝き〳〵したら、百合はとう〳〵どうなるか。そこが末後の牢關ぢや。不道不道ぢや。吾宗無言句無一法與人ぢや。衲は提唱することさへ嫌ひぢや。方々巡錫するのは、大根機の者の入室を

聞くのみぢや。元來舌筆は衲の能處でない。經有經師論有論師爭怪得老僧ぢや。したが宗演などがあちらこちらと、說き廻るが、果して其效があるか何うだか、恐くは勞して効なしだらう。餘計な御世話といふかもしれぬが、敎海は一味ぢや。いふべき權能はたれにもある。一人出家皆號釋氏とは、佛家の憲法ぢや。互に相諫むるは佛祖への孝ぢや。おしやべりにあるくより、やはり鎌倉に居て、ラッセルなど小乘根機の外人でも接得する方がよくはないか。曾て「シカゴ」の宗敎大會の時であつた。發錫に臨んで有志の喜捨を募つた。まづ山岡に行つた、例の意地惡の山岡ぢやから、一寸ひつかけた。宗演さん「シカゴ」見物もよいが、禪學者たる者が是に居て「シカゴ」が見えぬか。歌人は坐ら名所を知るといふてはないか。わしの目の前へ「シカゴ」を出して見よ、それが出せぬなら喜捨は御免ぢや。平生の修禪の力はかういふ時にあら

はるゝ。室内で透つても眞劍勝負になるといかぬやつぢや。舟中大學疊上水練はやくにたゝぬぞ。とう〳〵その場は山岡の寄附はおぢやんになつた。しかし人情に袢されてあとで五十圓出した。十方虛空自他不隔毫端といふてはないか。「シカゴ」はおろか、須彌山を芥子に納るゝさへ何のことはない。白隱は毒語心經の初めに、藕線孔中弄快鷹といつてをる。檀林皇后は、唐士の山のあなたに立つ雲は庭にたく火の烟なりけりと、投機の歌をめした。鹽官聞き得て東域深悟人有、丈夫氣息と褒めた。これが分れば「シカゴ」を手のひらに載せて、さあ御覽と出すとが出來たのだ。可惜乎。それなら山岡が千圓出すのであつた。衲が又彼にいうた。宗敎大會へは、佛敎代表か、禪宗代表か。佛敎代表なれば問ふ處にあらず。禪宗代表なれば、此南天棒の點檢を經ねば決して遣ることは出來ぬ。佛祖の面へ泥を塗られては困るといつた。勿論通佛敎て行つたらしい。尤もあの時は慶應義塾のほや〳〵ぢやつた。今日ては、年もとり、其後修行もやつたらうから、吳下の阿蒙ではなからうが、名利に狂奔すると、境界が退歩することもあるから、氣をつけぬと一生を棒にふるぞ。南天門下深く猛省せねばなるまいぞ。諸大德乞ふ左の語を記せよ。

世念濃厚道念輕微。道念濃厚世念輕微。大惠云。生處使敎熟熟處使敎生。

二十四、手紙三十貫

數十年來四來の手紙は、必ず保存して山の如く積みあげてある。しかし年月を部分にしてあるから、いつても繰出すことが出來る。塵もつもれば山とやら、目方は三十貫以上に達してをる。封筒の端は必ず鋏

にてつみ、決して手て裂くやうなことはせぬ。思はねば手紙は書けぬ。今は賓主なりと雖も、皆是當來の佛祖てある。何うして輕卒に扱はれう。しかし乃木さんや山岡など有名の人の手紙は、所望に任せて呉れてしまうた。これも粗末に取扱つてをらぬに違ひない。おれは遺言をして置いた。衲が死んだら、この手紙を盡く棺に詰込み、死體のぐるりを埋めてもらいたい。もし餘るやうなら酒に浸して、嵩を小さくして、大抵なら殘らず詰め込んてくれいと命じて置いた。おれは八十て死ぬるから、これからの手紙は知れた者だ。尤も手紙の人名は數萬てあるから、名は一々覺えるわけにはゆかぬが、手紙の貯へてある土藏に向つて、日々回向を怠つたことはない。手紙鄧州の名はおれの方からだす計りてはない、向うから來るのも隨分多いから、其邊からも名がつくだらう。此方からもやはり二三十貫目を分布して居るに違ひない。

落花有情流水豈無情ぢや。君戍交河春復冬。寒衣到日看親封。莫嫌襟上斑々色。是妾燈前滴淚縫。錦繡段寄衣曲ぢや。此情ありての禪ぢや。

二十五、壽塔及棺桶否棺壺

壽塔は昨年藤田自徹居士の一基建立ぢや。花崗石て立派に拵らへた。千圓かゝつたとのことぢや。壽塔の下には、棺桶を入れる石の箱も出來てをる。ちやんと石の蓋も調うてゐる。其蓋に此中有風露之香と書いておいた。さて又棺桶は齋藤幾太居士が、自分の經營せる陶器所て拵らへた。これを燒くには一年間の工夫を費やした。なにしろこの大男が坐禪してをるだけの餘地ある大棺ぢや。周圍が八尺て高さが五尺、これをやくには釜から拵らへねばならぬ。大きなものは燒方

が惡いと直に壞れる。しば〳〵失敗したから、西京からわざわざ技師を雇うて來てやらした。金に不自由のない人ではあらうが、佛心あるにあらざれば迚も出來ぬ仕事ぢや。いよ〳〵五月出來あがつた。四箇拵らへあげた。一箇は藤田家へ、一箇は自宅へ、一箇を海清へ、一箇は破損した時の豫備に、工場に保存してある。實に用意の周到なものである。衲は其棺の周圍に例の南天棒をかいて、其上に、道得南天棒道不得南天棒別々又是千年、桃核とやつた。死んでも宗旨は忘れぬ。いづれ地獄や極樂を巡錫して、彌陀や閻魔を南天棒でぶんなぐつて遣るつもりぢや。千年桃核は無功用底ぢや。表では千年も經つた桃の種子は迚も芽を出す者でない。勞而無功ぢやが、それをやはり植ゑてをる馬鹿さ加減の所に妙がある。擔雪埋井といふも同じことよ。知音稀れなりぢや。骨折て知るがよい。死んで行つたら歷代の祖師や三世の諸佛を集めて提唱する考へぢや。

蓋には喝と大文字で書き、從這裡入と著語した。關山は柏樹子話有賊機と云ひ殘したが、南天棒のは之だけぢや。關山と同か異か。速道速道。衲は八十入滅を期してをる、もうすつかり仕度が出來た。閻魔殿何時御迎ひに御座つても、差支はないぞ。呵々大笑。

しかし、いかに富豪の寄附とはいへ、かゝる立派な者を拵らへて貰うといふことは、不陰德になりはせぬかと、ひそかに恐懼してをる。

二十六、禪の特色

禪の特色は、印可證明と、的々相承にあるぢや。禪の全體が何程立派であつても、此一條を除けば骨がない樣な者で、一向に直打はない。印可證明とは、正傳の師家が直接に有力の弟子を點檢し、僞か眞かを檢定し、

贋物なれば再行脚を命じ、更に精彩をつけしめ、眞物であつたなら、眞物なりと證明し、度生の大權を遺囑するのである。これを相續して行くのが、的々相承といひ、其人を法嗣といひ、又法子ともいふ。

印可の印は、印定の義で、世間でも間違のなき證據に、印形を捺すではないか。可は許可するのぢや。印可證明は直に的々相承となるのであるから、一つに見てよい。

的々は嫡々とも書く。音相通じ意も相似てをる。たとへば、一家の主人が、全家産を其儘傳ふべき、正當の嫡子に傳へ、其嫡子は主人となり其家産を又其儘傳ふべき、嫡子に傳ふる樣なものぢや。的は端的の的で、やはり間違のない正眞正銘の義である。印ぢやの、的ぢやのといふ文字は、禪と密接の關係があるから、參究する價があるぞ。

さてこの印可が、釋迦拈花。迦葉微笑してより以來、今日に至るまで、連綿として絶えず、相續してをるのは、獨り我禪の一宗あるのみぢや。然して其見地が、釋迦と一分違つてゐない。違て居たら印可は出來ぬのぢや。乃て一器の水を一器に瀉すが如しと、古來譬へてをる。相承の事を瀉瓶といふも、是から出た名ぢや。何と尊いものではないか。大に自尊自重の向上心を起してやるがよいぞ。不見言天上天下、唯我獨尊。

二十七、印可狀（嗣書）

印可をうけると、印可狀といふものを、師家から授與して證となす。其外に親しく用ひ來りし法器を副へて、父子の間を益々親密ならしむるを常としてをる。印可狀には必ず師家の印をつく。ずつと昔のには印形はない。でも人が贋は書かなんだ者。今は印はさて、其師家は的々相承と世に許されたる師家であつても、贋印をつくる。そこで大

な印を拵らへておかねばならぬ。其印狀は十方ひとしく信據すべき者である。これさへあれば、如來の代理人と稱することをも得る。實に大切なものである。しかるに何時の世よりかなりけん、此印可に僞物が出來た。これを冬瓜大の印子といふぢや、盲判ぢや。少々未熟でもべた〳〵捺す。今日に至りては印狀の濫出停止すべからざる有樣である。これもと法子を作ること多きに過ぎたる餘弊である。白隱も良哉を許すこと三年早かりしといはれた。ずつとまへの古人も又間々この失を免れざりき。神聖の禪學社會にも、かゝる危險思想が混入してをるから、實に油斷がならぬ。このゝゝに打捨なば、玉石混淆して、學人の歸著する所が分らなくなつて、法は遂に亡びてしまはねばならぬ。どうしたらこの弊を救ふことが出來やうか、南天棒が數十年來苦慮するはこの一點にある。時正に是禪道革命の時である。無門云

欲得撐門並拄戶須赤脚上刀山。

二十八、宗匠檢定法

昔は革命といへば血の雨を降らした者だが、南天下の革命は刃に衂らずして速成就する、即ち宗教檢定法である。師家の看板をあげてをる漢を、片端から、密室内で點檢する。勿論眞劍勝負ぢや。其問題が世にも名高き、宗匠檢定法である。實に微細を盡した者だ。此問題を拵へたのは、明治二十六年であつた。まだ歷々方が生てをつた。潭海、無學、匡道、滴水、鈎叟、皆其擧を贊して問題邊に向ては全力を假てくれ、古今を盡して餘蘊なき者である。法身。機關。難透。難解。法窟爪牙。五位。十重禁。末后牢關。最後一決等。其粹を拔き、宗通。說通。罄無不盡ぢや。さあ出て來いと本山で叫ばした。身杉世杉を顧て、此涙河に身を投ずる者が一人

もなかつた。何しろ落第すれば喚鐘を取上げ、墨染の衣に鐵鉢一つて、再行脚を命ずるといふのだから、名利心ある者は應ぜぬのは當前だ。然し中にも一二不惜身命の者があつた。今てはど偉い者になつてをる。不入虎口虎兒を得ずぢや。いつても來い、時と處を擇ばぬぞ。何時迄生きてをられる者ぢやない。早く埒明けぬと、後悔臍を嚙むも益はないぞ。點檢者は此南天棒其衝に中るわ。いや强て衲計りに限つた事はない、敎海はお互ひの共通財產てあるから、力のある者が、誰てもとるによい。釋迦の眼には一視同仁ぢや。實に此南天棒を試驗するといふ漢が出てくればよいのだ。いつても法柄をお渡し申すぞ、名利のみありて、菩提心がないから、出て來る前に勝敗の事許り考へて、大法の爲といふ事を忘れてをる。衲が檢定法を唱へてもう二十五年になる。彼の二三の外一人も出て來る漢がない。是は禪海に人なきを證するに餘りありだ。どうも仕方がないから、我黨の中て、檢定法通りの人物を作り出して、かの相似の禪は、自然消滅の時を俟つより外はあるまい。種さへつきねば、其人物等が革命の方法も講ずるてあらう。佛法はまだ地に落ちぬぞ。禪はまだ亡びぬぞ。南天棒は死んてもこの古今未曾有の檢定法を瀉瓶したものがをる。二十五年來四五人は作つておいた、安心してよろしい。日の本にたえて久しき禪の道、ふり起こせしは這南天棒。おれは謝枋得の詩が好きだ。其冒頭に、雪中松柏愈青々。扶植綱常在此行。（中略）南八男兒終不屈。皇天皇土眼分明。我禪も丁度この場合がある。

二十九、衣鉢の事

釋迦が迦葉にこの大法を傳へた時、印可の證として、金襴衣を授與され

た。この金襴法衣に付ては說がある。今日いふ金襴ではない。只尊んでいうたのぢやといふ說で、實には屈眴布といふ、至つて粗末の布片で拵へた袈裟であつたのだ。印可狀には傳法偈といふ者をかいた者ぢや。例へば釋迦の傳法偈は、法本法無法。無法法亦法。今付無法時。法々、何曾法。達磨のは、吾本來玆土。傳法救迷情。一花開五葉。結果自然成。今も印可狀に偈をかくは、之より根原するぢや。さて此衣が六祖の時に至り、大分法子が多く出來始めた。殊に明上座が太庾嶺頭まで奪ひに行つた事など思ひあはされ、六祖がとう〳〵士藏の中にをさめられて、釋尊以來の衣を授けることは、廢止にされた。誠によき取斗らひぢや。後の爭ひを思はれたのだ。鐵鉢は是非比丘たる者の持たねばならぬ者、これて命をつなぐのぢや。これも傳法の證據物にされた者ぢや。六祖已前には本據なきも、五祖には必ず衣と鉢とを傳へられた。そこて世俗ても宗旨は勿論學問や、技藝書畫などの相承にも、衣鉢を傳ふといふことを熟字に用ひるやうになつた。釋迦的傳の袈裟は、六祖ぎり傳へなくなつたが、其代りに名々思ひ〳〵の物を授けられた。やはり古風を重んじ、袈裟は必ず與へるやうになつてをる。衲なども、袈裟は必ず與へた。袈裟の外にまだいろ〳〵大法に關係あるものを添へてくれる事になつてをる。頂相を書き與ふるのも多い樣ぢや。古人の例も澤山あるが、傳燈を見ると分るから玆に略す。近頃衲が一居士に與へた印可偈に曰く。好此飽參士。向誰得法傳。一喝南天棒。殺活自由禪。

これに添ふるに竹如意、安陀衣(本山紋章入)。南天帽子とこれなり。釣叟は海面無塵波洗波とかいた。隱山家などには、坐水月道場。修空華萬行とかくのが多い。凡そ禪に入るものは、衆生無邊誓願度の願心な

くんばあらず。形以下のことは自分が出ずとも、各々研究進歩しつゝあるが、此事に至りては名利を捨てねばならぬことぢや。不生産的の仕事ぢやからやりてが少ない。動もすれば種草が絶えなんとする有様であるから、この禪界を自分の兩肩に擔ふといふ氣概がなければならぬ。それには護法善神となるよりも、傳法の菩薩とならねばならぬ。是非とも印可を得て那一人となり、報恩底の人とならねばならぬ。たとへ介鮮の虫となるとも、聲聞となるなかれといはれた。自分計りの安心は、即ち聲聞である。一人も洩らさじと、修してゆくのが、眞の禪であることを忘れてはならぬぞ。

三十、黄檗臨濟の傳受

臨濟は三年間黄檗の處にゐたが、すでに何も彼もやつてをつたから、問ふことがない。睦州といふ尙友にいさめられて、如何佛法的々大意と問うた。三度問うて三度ながら打たれた。斷念して去らんとした。睦州は黄檗の耳を吹いた。黄檗は大愚の處にやつた。臨濟はとうとうこゝて大悟した。再び黄檗に歸つて黄檗の印可をうけた。黄檗は印可の證として、百丈傳來の禪版と机案をやつた。臨濟は、侍者よ、火を將來れ燒却てんというた。黄檗云、雖然如是汝但將去。已後坐却天下人舌頭去と。臨濟の方は大見識ぢや。其時分も印可取がはやつた者と見える。臨濟はそんなけちな根性はない。心に十分足つた所があるので、外に待つ所がないのぢや。大應國師は、好兒不使爺錢とほめた。眞實超師の作略である。然し流石は黄檗ぢや。汝の見識甚だ好し。然しまあ取つておけよ。他日汝が法柄を握るの際、お前誰れの印可をうけたといはれた時、これがあると再び其人に口は開せまいぞと。自

分の爲めには入るまいが、禪は元來自分の爲めてはない、人の爲めにやるのぢやから、是非とつておくものよと、强ひて受けさした。

おれは羅山の印可を二十九の歳に取つた。人に誇る爲でもなく、勝他の念もない。只人天を接するとき、第二第三の人の信をうるのみぢや。第二第三に擇法眼がない。かれの見る處は印可狀のみぢや。そこて印可狀は大事なものぢや。どんな無眼子でもこれがあれば、師家となつて、無眼の學人の尊信をうけるのぢやから、これがもし僞物であつたなら、其學人につよき迷惑てある。今や印可の弊は滔々流れて氾濫せり。禪の神聖は皆無となつたぞ。どうしても檢定法を盛んにして、爬羅剔抉刮垢磨光、大に陶汰せねばならぬ。

今印可取りは老師號の株券ぢや。やるものも、とるものも、名利のみぢや。一盲衆盲をひいて、禪の神聖を汚して、自ら抜舌犁口の因緣を結んてをる。どうか黃檗の印可を燒却んといふた臨濟の爪のあかても煎じて飲め。禪をおもちやにせぬがよいぞ。

百丈は黃檗に机案と禪版とを與へ、潙山には柱杖と拂子とを與へられた。机案はよりすがるもの、禪版は膝の上にたて、脇を支へて坐睡するため。無論横になるといふことをせぬから、いろ〳〵の道具がある。受けるも法の爲め、授けるも法の爲め、互ひに私はない。大法本位で、少しも私はない。そこて次下の僞山仰山の問答を知るがよい。

三十一、臨濟の印可に付僞仰父子の評

後僞山問仰山一臨濟莫辜負佗黃檗一也無。折角師匠の賜を、將火來などいふは、彼師匠の黃檗に背いたことになりはせぬかと、僞山が問うた。知つて問うた。父子唱和の處ぢや。仰山云不然。僞山云子什麼生。

どういふわけか。仰山云知恩方解報恩。この作略出藍青於藍。眞の報恩なり。僞山曰從上古人還有相似底也無。父子色々問答をして、後世の人に垂示する古人にも其例があるかとなり。僞山云有秖是年代深遠不欲舉似和尚。近いことはあなたも御存じ、ずつと大昔からあつた事ぢや。僞山云雖然如是吾亦要知子但舉看。そうでもあらうが、聞かしてくれい。皆の者へ知らせてやれとひゞく。仰山云秖如楞嚴會上阿難讃佛云。將此深心奉塵刹是則名爲報佛恩。豈不是報恩之事。楞嚴經に出てをる。阿難が佛法の難有さを感じて曰く、只此大菩提心を以て粉骨碎身し、上求菩提下化衆生の願心あるのみであります。そして塵々刹々の諸佛の大恩に報い奉るより外はありませぬといふたのが、知恩方報恩といふものであります。深心とは菩提心をさす。塵々は多さこと。刹々は國々なり。三千大千世界、何の國も一々佛ましまして、化益しまします。深入禪定見十方佛とあれば、禪をやると塵刹の諸佛が皆見えるぞ。僞山云如是々々。見與師齊減師半德。如是如是は許可した善哉々々といふに同じ。見地が師道と同じものなれば、師の德をさくようなもの、見が師にすぎてこそ、師の德を加へ增すわけぢや。これらの人なら印可を與へてもよい。黃檗が强ひてもち去らしたもよい處ぢやとなり。父子互に評判して、後世の人を激勵した。學人には出藍の氣概がなければならぬ。師匠でも佛祖でも、菩提心の上からみれば、一切衆生ぢや。自己以外は皆濟度の領域ぢや。まづ自分の師匠を濟度するといふ氣概が、即出藍ぢや。又これを跨釜の氣概ともいふ。烟の事ぢや。烟はお竈の下から出て竈の上に昇つて行くから出た名ぢや。親まさり師匠まさりが眞の報恩ぞ。臨機不讓師といふもこゝぢや。

三十二、冬瓜印子の事

今時の印可が即ちこれぢや。似て非なる者ぢや。曖昧で分明せぬ。冬瓜を横に截つて紙に捺せば、印に似てをるが頗る曖昧ぢや。碧巖九十八則の評に、只管諸方の冬瓜印子に印定し了らるとある。諸方とはあちらこちらの瞎知識をさす。大恵書の中にも、冬瓜の印子に印定せられ、便ち我千當すといふ事がある。自分が先に知るのではない、印可を貰うて後に悟つたと思ふ、印可の奴隷ぢや。印可狀がやけたら佛法はなくなる。臨濟の燒かんとしたこともこの故ぢや。一休も養叟の印狀を燒いた。やくも法の爲め、燒かぬも法のため。推してもゆく、挽いても行く。車の行くは同じこと。只菩提心さへあればよい。冬瓜の印子に迷はさるゝなくんばよし。

三十三、他宗の安心には證明がない

佛教も宗派は澤山分れてをる。耶蘇も堂々たる宗教ぢや。殆ど全世界山分ぢや。近頃は回教や甚しきは天理教までも宗旨を具へてをる。いづれも安心といふものがある。安心が確立せねば宗教は一日も立つ事は出來ぬ。其安心の方法は各派共に所依の經論ありてきまつてはをるが、如何せん具眼の者に安心を證明するといふ事がないから、眞僞を見分けることが出來ぬ。徒に衆盲象を評するの譬がある。抑經論は死物である、これを生かすは人にあるのぢや。其人がなかつたなら、ほんとの安心を得ることが出來やうか。信仰といふ者は無形の者ぢやから、各自自分免許の勝手氣まゝの安心法で、これでよいときめられては、危險も亦甚だしいといはねばならぬ。西の方へ行かんとして、

足は東へ向てをるかもしれぬ。行けば行くほど遠ざからねばならぬ。眞宗などの安心は純他力の信仰て、我を捨てゝ彌陀の本願に歸投するといふのだ。これを一向專念彌陀佛というてをる。彌陀經では一心不亂といひ。觀經では、至誠心。無量壽經では至心といはれてをる。其我を捨てた信仰といふものは、どのよな者ぢや。即今出して見せよといはるゝと皆へこたれる。おれの處へ眞宗坊主が澤山來るが、かれらがいふを聞くに、眞宗では物を知らぬやつが、無茶苦茶にありがたがる。安心をもらうたと、狂喜するが、さて色々物を知ると其安心が動き出す。後生の一大事が何んだかたよりなくなる。丁度遊野郎が盛んに金をつかふときは、夢中ぢやが、人の意見などを聞き、氣がつくと馬鹿らしくなる樣な物ぢや。衲は彼等の信仰を夢信又醉信と唱へてをる。金剛の信心といふ者は、そんな消長ある者でない。必竟具眼の者が無いからだ。果して昔から異安心が絶えぬ。近頃は小川宗とか中村宗とかいふのが出て、本山に楯衝くが、本山でも具眼の者がないから、鶴の一聲てこれを統一する事が出來ぬ。ある眞宗坊主はいふ。眞宗では法主を始め、千五百萬の信徒、二萬の僧徒に、一人も眞の安心を得た者はないと云てをる。今日の大紊亂は其分てある。否眞宗許りてはない、各宗皆然らざるはない。宗教は國の生命てある。安心なき宗教は生命なきなり。國家の死活問題てある、あゝ忽諸に附すべき者ならんや。

三十四、無免許醫は危險なり

印可證明とは試驗と免狀とを意味してをる。證明法なき佛法(他宗及相似禪)は丁度免狀のない漢法醫者みた樣な者て、これに人命を托するは危險極る事てある。維新前試驗のなき時の醫者ほど卑しき職業は

なかつた。自分の實力を鍛るといふことは少しもせぬ。名利のために、讒諂面諛至らざる所なかつた。今尙ほ其弊が殘つてをる。今日免許の嚴しい世の中でも、時々もぐりが檢擧さるゝ。羊頭を懸けて狗肉を賣る相似禪もこれに同じぢや。尤も醫者の方は新しきを尊ぶ、これから研究すべき餘地がまだ〳〵澤山ある。學問の統一といふものは、いつの時代やら分らぬ。禪は未生已前を尊ぶ。古い程ねうちがある。古いものはかざりがない、古人には僞物がない。どこまでも古人を尊ぶといふは是に因するぢや。醫者も內務省試驗にては、とても學科が不順序で、好い醫者を作ることが出來ぬから、大正四年から停止して、大學や專門學校でなければならぬやうになつて來た。國家の進運上悅ばしき事ぢや。禪の方でも、衲の宗匠檢定法で、嚴重に淘汰法を行はねば漢法醫者の跋扈時代の樣になつて、人命を玩弄物にせられねばならぬぞ。危險々々。猛省せよ。猛省せよ。

三十五、各宗の所以相承

何宗にも相承をいはぬてはないが、的々てない。直接てない。人から人に傳へた者てない。後世の學者が自分の唱へた學說が、古人に似た所をとつて、牽强附會して、系圖を拵へた者だ。肝心な御本人は、年代深遠ぢやから、御存じない。各宗とも龍樹を宗祖としてをるが、これは其說いた敎相を判釋して、各宗よりたかつて、我田引水した者て、龍樹がをつたら叱りとばすかも知れぬ。さきやさほどに思やせぬかもしれぬ。釋迦は楞伽經に、四十九年一字不說といつた。この事は言說や思慮分別の及ぶ所のものてない、皆指の論ぢや。月の話てはない、龍樹の心はどうしてかきあらはすことが出來やうか。龍樹自ら知るのみぢや。

直接に以心傳心した、迦那提婆あるのみぢや。果して各宗廢立といふものが出來て、後世蝸牛殼上の爭ひをなして、甲論乙駁歸着する所をしらぬ。天台にも山家山外の爭ひ今に絶えぬぞ。日蓮宗でも十派互ひにかみあつて、不受不施は、他九派は日蓮の正統にあらずといふ。曾て「シカゴ」の宗教大會に日蓮宗から、眞言と淨土は外道なりと通信したことがあつた。つまり各宗に具眼の者がをらぬから、統一することが出來ぬのぢや。眞宗では、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空を七祖と立てをるが、其人と人との間百年二百年の間隙がある。殊に善導と源信とは支那と日本で、其時は郵便電信も無つた。處も違ふ。時もちがふ。それに相承が今の迷信みたやうなことがある。善導が觀經疏を作るとき、彌陀が出て手傳へをしたとのこと。そこでとう〳〵仕舞には、首をくゝつて死んで極樂行きを急いだ。禪は世に親しむ。かれは世を厭ふ世の賊である。其弊濟ふべからざる者あり。源空は盲摸索に經藏から、善導の書を得て、吾は善導一師に依ると云ひ出した。意氣地のない事ぢや。東嶺云。獅子不レ食レ鵰殘猛虎不食レ伏肉。衲僧門下實智尙不レ要何況假名耶。驅レ耕夫之牛レ奪レ飢人之食。始可レ以爲レ眞參詳而已。可レ知我宗無レ言句無一法與レ人ぢや。ないほど強いものはない。試に虛空を打てよ、虛空痛痒なし。打つ者自ら疲れて息まんのみ。彼等皆教網の中に蠢動せり。我宗無依の道人の、露堂々、阿轆々たると比すべけんや。これは議論が横道に入つた。到底眞の相承がないから、皆あてにならぬ。所謂かれの相承は、上述の如くである、何とたよりない者ではないか。丁度儒者に道統といふ者がある。各宗の相承はこれに似てをる。禹湯、文武、周公、孔子、子思、孟子、朱子などいふが、これ又人と人との間に年代がはさまつて、直接でない。孟子に至りては、圭角ありて漸々退歩の

模様がある。あゝ眞の相承なき宗旨によりて安心を求めんとするは、木に縁りて魚を求むるよりも愚なり。危いかな又氣の毒なるかな。

三十六、邪決定。正決定

世に安心決定といふに、邪決定と正決定とありといふ。しかしさういふ連中に具眼の人がないから、證明を與ふることが出來ぬ。どうして正邪を決することが出來やうか。しかし先入爲主で、容易に人のいふ事を聽かぬ、おかたなりといふやつぢや。上智と下愚は移らずぢや。下愚のうつらぬはどうかなるが、上智の氣取やには困るよ。どうしても法窟の爪牙、奪命の神符で、どし〳〵析伏をやらねば、何によりて邪決定を濟はんや。佛云、是處多患難我善爲救護と。我黨の士一入奮起せよ。患難は煩惱障、所知障なり。今は所知障を主となす。所知障は見聞覺知である。彼等は聞いて信ずるといふ、吾禪は然らず。聞く前に信ずるなり。鑑在機先ぢや。面白いことぢや。教者法師の夢にだも見る能はざる所である。七佛已前四時春。

三十七、禪は公宗である。各宗は私宗なり

禪は公宗である。釋迦の許した宗旨で、それが萬世一系で、今日まで一糸紊れず相續してをる。恰も我國の皇統連綿と同じ事ぢや。他宗は私宗である。釋迦滅後千年、而も龍樹が悟らぬ前の論說を基礎として、私に建てた宗旨ばかりぢや。勿論前にもいふ如く、龍樹直接の相承ではない、龍樹の印可した者は迦那提婆あるのみぢや。その系統が即ち我禪ぢや。其外決してない。そして道元和尙の師、如淨禪師は、禪を佛法の總府というてをる。どの宗旨も禪の總府即ち太政府に貢して、

其印可をうけねば、店出しは出來ぬ筈ぢや。硝子を以て金剛石という て賣り歩くやうな者ぢや。嚴罰に處せねばならぬ。あゝ羊頭狗肉の徒、猥りに佛道よばはり無眼無智の可憐の衆生を惑亂して、此報身報土の大日本國を暗國世界たらしめんとするか。可忍之將何不可忍や。宗門十勝論には、委しく禪の長處特色十ケ條をあげてある。虎關國師の著ぢや。讀んでもらいたい。同書に曰。唯我禪門、婆伽直下。受授嫡聯。故爲一代公傳宗門之號不亦宜乎。豈他氏之所得稱哉。婆伽は具に婆伽婆又薄伽梵一切智とも譯す、釋迦のことぢや。宗門の號も禪家の占有權ぢや。宗は能尊ぢや、大本家ぢや。この門に入らずんば、菩提の室に上るを得ず、故にこの名が出た。あゝ何の愚者かこの公明を捨てゝ私暗を取る者ぞ。

三十八、禪餘の各宗は悉く外道なり

何故か。安心に證明が無いからである。試みにこれを因明即ち印度の(ロジック)で捌いて見よう。

日本禪餘の各宗は外道なり、(宗)。安心に證明なきが故に(因)。猶し實印なき證書は、權利なきが如し(喩)。

禪道は眞箇の內道(佛法)なり(宗)。安心に證明あるが故に(因)。猶し實印ある證書は常に權利あるが如し(喩)。過ありや。過ありや。速道速道。外道といふは不穩の言のやうぢやが、反省を促すには、ちと過激の言を用ひねばならぬ。畢竟我禪に包容したい同情心に外ならぬぞ。又且憑據なき說は吐かぬ。法華を讀んでも、方便品の正說段があれば、譬喩品の領解段がある。さとつた處だ。然し證明がなければ危險だ。そ

こて佛が信解品で證明した。經家これを述成段といふぢや。それから授記段ぢや。たれもやればいけるものぞ、人々佛性があるぞ。久遠實成なる事も、修すれば忽ち悟ることを得と預言した。記莉は、預言ぢや。さて其次が歡喜段ぢや。たれかこの因緣遭遇をよろこばざらんや。みよ〳〵釋迦は夙より證明の事を五段の內の中心としてをるぞ。昔永嘉大師は、涅槃經を讀みつゝ大悟した。有名なる證道歌は此人の作ぢや。もうこれて大丈夫だときめこんで、一意たゞ度生的に出られた。ある時尙友の玄策といふ人がいふには、近頃御前は大悟して頻りに諸方へふりまくそうだが、それは惡い事てはないか。全體御前はたれの證明をうけたのぢや。我聞く、威音王已前即得。威音王已後無師。自悟盡是天然外道なりと、もし證明なくんば何を以て眞僞を分たん、願くは猛省せよと諫めた。流石は永嘉ぢや。あゝわれ誤てり法兄乞ふ我を點檢せよ、謹んて證明を受けんと。玄策云善哉々々。善言を容るゝことの速かなる事よ。されど我は未だ輕し、我に師あり、的々相承の人なり、法兄を證明するに十分なりと。直ちに伴うて六祖の處に至りて、數番問答の後、遂に證明を受けた。やはり初め悟つたのが間違つては居なかつたが、もし點檢の上違つてをつたら、所謂認賊爲子て、惡毒を社會に流さねばならぬことてあつた。人には自惚と先入爲主の習慣がとれきれぬものぢやから、自分免許ほど危險のものはない。各宗に證明がないと極つたなら、玄策のいはるゝ如く佛法てはない、やはり天然外道といはねばならぬ。今この外道天下に滿つ。各宗ばかりてはない、我禪にも大弊が生じてをる、何を以てこの苦衆生を救ふ事を得ん。宗匠檢定法は何しても無くてならぬ。來れ何宗を問はず我に來れ。我は汝等に永遠不滅の生命を與へん。無常迅速なり勿躊躇

三十九、我國禪界の現狀底

究通通變。面白さことぢや。群陰剝盡すれば一陽來復す、これも自然の理ぢや。梅經寒苦發清香かうなければならぬ。我禪今は究極のありさまぢや。その儘に打捨なば、枯凋滅亡するより外はない。妙な者だ、無而忽有とこの南天棒があらはれて、陽氣の媒となつて、禪界を回春して正に花を開かしめんとしてをる。佛祖の冥助か諸天の加護か。悲觀してはいけぬ。ヒステリーになつてはならぬ。一人奮起して者箇の南天下に結晶し來たれ。

禪は數々難ぢや。一難を經るごとに一生面を生ずるも面白さことぢや。愚堂國師の時すでに禪は一たび極に達した。關山國師三百年遠忌拈香偈に、二十四流日本禪。惜哉大半失其傳。關山幸有兒孫在。續燔聯芳三百年と、愚堂八十三才の時ぢや。二十四流はもう殆ど亡びて居つた。この詩に付いて面白い話がある。兒孫の二字を、始め愚堂と書いたげな。そうすると傍に大愚和尚が居て、目を瞋らし、貴公獨りの佛法ぢやないぞ、おれが居るのが分らぬかと。流石の愚堂も一本參つた。そこで兒孫の二字に代へたといふ事ぢや。かういふ氣概のあるやつがあつたから、僅に懸糸の佛法を支持へ得た。さうして一子至道無難を生んだ。無難の子が正受老人ぢや。皆一粒だねぢや。共に坊主ではあるが坊主の事はしらぬ。居士といふ方が氣がきいてをる人達計りだ。居士でも何でもよい、佛法は一切衆生の共有物ぢや。菩提心さへあれば取るの權利がある。正受老人曰、我此禪宗。衰廢于南宋至明末拂底滅絕。其餘毒雖傳在日域恰如白晝見斗。汝輩臭瞎破凡夫。夢知之乎と、悲憤餘りあり、當時の衰態知るべさなり。危機一髮てあつた。正受

老人の子が白隱ぢや。白隱に至り俄然として法子を增した。多い內には不肖も出る。世の澆季と共に漸々衰微して、今日は、又愚堂時代の比ではない。又一重ひどくなつて來て居る。禪がなければ人がない、人なければ國なしぢや。禪は國の光りである。命である。何しても亡ぼすことは出來ぬ。今師家と稱する者が六十五人をるが、前にいふ通り、皆野狐相似の禪ばかりで、一盲衆盲を引いて、反つて無い方がよい。あればむしろ惡い者を拵へる。專門道場も二十五あるも、有名無實で、名利勝他の人物ぢや。虎溪はさすが古道場で、常在五十はをる。潭海の時はよかつたがもうだめだ。それから各本山は大抵大衆が多いが、十人たらない處もあるさうだ。一人でも道心堅固の者さへあればよいが、西瓜の入舟みたやうに、頭ばかり聚めても、肝心の道心がなければ穀潰ぢや。きくらげに生るゝやつ計りぢや。成僧不レ通レ理。復身還信施長者八十一。此樹不生耳。耳はきのこぢや。きくらげぢや。徒らに信施を消する者は、業の盡きるまできのこに生れるとの事ぢや。迦那提婆の偈ぢや。長者の八十一といふは、昔長者の家に一比丘を養ふも、道眼未明が故に、とう〳〵きのこに生れかはつたのだ。長者の八十一才まで業因つきじと預言したのだ。恐しき事ではないか。偶々稀に憤慨するやつがあつても、正師がないから鉗鎚の方法がわるい。遂に善美の種子をくさらしてしまう。公案禪の通弊である。公案の要は從前の惡知惡覺を蕩盡して、公案其物になりきり、內外打成一片となり、自己を忘ずるを以て主眼となすに、今のは室內に入つて公案の說明を覺えて來る。丁度算盤の問題を決するやうな者腹の中へ公案の理會をたくはへる。自由の禪は反て究屈となり、重荷となり、大事の淸淨法身が、死見解糟妄想の入物とならねばならぬ。室內は妄想の捨處と

いふのに、妄想の仕入れ處となつてをる、あさましきことである。どうしても南天下の宗匠檢定法で、仕上たやつてなければ、世に立つて實効を擧げる英靈を打出することは出來ぬ。曾て妙心の大會に、七百の衲僧が出て來た。衲は一人て日々〳〵入室を聞いたが、一人として衲の無字を透過するやつがなかつた。中には歴々もをつたやうだが、公案を數へる習慣がついてをるから、一則て一瀉千里に透過することが出來ぬ。世間にない拶處を與ふると、直にへこたれる。公案を學問みたやうに心得るからだ。

要するに正師がない。學人に道心がない。其責は師に在つて機にはない。只管打坐を努めずして、公案禪に流れたから、見地が明白てない。行履が堅固てない。禪學亡國論を書ねばならぬ。南天棒も公案禪はとらぬが、敵の糧による兵法て、禪語ては騎賊逐賊といふやつて、檢定法案も亦已むを得ざる自然の要求ぢや。要するに人物を打出するといふより外はない。身命を抛つて粉骨碎身するより外はない。古人曰。不許夜行投明須行。又曰。夜行莫踏白。非水多是石。御用心々〳〵。一休は日中提灯を點て歩て、御用心々〳〵といふた。晝やら夜やら何時も黒暗々。

四十、壽塔の事

衲の壽塔は藤田自徹居士の信施によりて、立派に出來た。苟も衲の行動が菩提心と相應なかつたなら、やはり衲は大耳三藏に生れねばならぬ。きのこのとぢや。恐しきことぢや。今壽塔の因緣を說くも又是報恩底の一端ならんか。壽塔とは死なぬといふことぢや。阿彌陀は梵語て無量壽と譯す。彌陀塔といふもよい。淨土門のおかぶをとるつもりてもない。何れ石はいつか壞れるが、壞しても壞れぬもの

が眞の壽塔ぢや。南天が壽塔か、壽塔が南天か。南天が死なねば眞の壽塔は死なぬわけ。南天の菩提心は死なぬ。宗匠檢定法は死なぬぞ。しかあれば自徹居士は死なぬ。又壽塔を造つてくれた、功德無量ぢや。佛智を以ても計る事が出來ぬぞ。何を以てこれを知る。この信施に念が添うてをらぬ。惜いとも思はず、名譽心もない。只後人の標榜たらしめんといふ、度生心あるのみぢや。所謂淨施といふ者ぢや。臨濟は松を植ゑた。居士は石塔の周圍に南天樹を遶植したも面白き對照ぢや。この中でおれは入定するのぢや。弘法大師は生きながら入定したといふ事ぢや。これはてきぬ事ではなからう。惠舜尼は火定にさへ入つた。おれは死んで入定する。死んで生きてゐるのぢや。壽塔も亦浮ぶてあらうぞ。踈山壽塔の話とてやかましいも、こゝへらだ。しかも虛堂の大悟したは、この則てぢや。はじめ古帆未掛でやつたが、どうもわるい隋力がついたから、心機を轉ぜしむるために、運庵が南泉斬猫にかへた。白隱も無字で不可ないのには、雙手でやつた。虛堂も南泉斬猫では骨折つた。大地載不起の一轉語を下した位だが、實地を試むるに心未だ安からざる者があつた。終りにこの踈山壽塔を見た。四年間一貫した。一日無心三昧に入て、この話の拶所に所謂大嶺古佛放光底時節に築著して、大自在を得られた。しからばこの則は先祖傳來の寶物ぢやから、破損せぬやうに保存するは、吾々兒孫たる者の孝道ぢや。不見言祖禰不了殃及兒孫。さあこれからこの公案の商量ぢや。

四十一、踈山壽塔は難透の隨一

踈山も修行中は曹洞の悟りを立聞して、三十年間膈の病にかゝつた。それで罪根を消殞した。餘り履歷はよくないが、仕舞には偉い人にな

つた。さてこの人が年をとられたから、坊主共が報恩底に壽塔を作つた。さあ事苟もせずで、これを緣にして、直に爲人の涙をふるはれた。師曰〃汝將幾錢與匠人(なんぼやる積りか)僧云〃一切在和尚(あなたのお氣まかせ、さあこれからが眼のつけ所ぢや)師云〃爲將三文與匠人好。爲將兩文與匠人好。爲將一文與匠人好。若道得與吾親造壽塔(三文やるか二文やるか一文か、いづれがよいかいつてみよ)其僧茫然たり(禪を世間と違ふやうに思ふ。平常心是道なる事が分らぬ。無繩自縛の表なり。てこが公案の要所ぢや。まあ那箇の壽塔か那箇の文錢かと參究するがよい。那箇とて不思議はない。擬議せば南天棒をくらはすぞ)後有僧舉似大嶺。嶺云〃汝歸舉似疎山。道若將三文與匠人和尚此生決定不得塔。若將兩文與匠人和尚與匠人共出一隻手。若將一文與匠人帶累匠人眉鬚墮落(三文でも出來ぬ。一文遣つたら和尚も石工も瀨坊になる。二文なれば出來べえと、二文は文久か天保か寛永通寶か、こゝが拶所だ。清淨境を攪拌してみせた。提水放火手段ぢや。白隱が難透に入れたも此邊だ)僧回舉似疎山(この僧來々去々何の了期かあらん。何ぞ一掌を與へて兩文錢を示さゞる。可惜乎)師具威儀遙望大嶺禮拜讃歎曰(是精知精ばけもの同士ぢや。)將謂無人(反語なり。人なしと思うたが豈計らんや有たとの意)大廈嶺有古佛放光射至此間(先生といはるゝ程の馬鹿ぢやない。天人雨花須菩提狂喜不求特勝特勝自至。光りをみて何かせん。電に悟らぬ人の尊さよ、芭蕉)雖然也是臘月裡蓮花(百珊の大砲をむけた冬の極寒に蓮花が咲くかな。求めたとてむだ骨ぢや。求心止時即無事ぢや。さり乍ら夏の蓮花は直に散る。妙法蓮華も口頭の玩弄物、今此冬の蓮花こそ何時も咲て萎れぬぞ。さあ出てみよ。大嶺をして徒らに法螺を吹かすな)大嶺聞得云〃我與麼道早是龜毛長數尺

成程さうぢや。衲が斯様に文錢の事をいふたのも、實は元來なき龜毛を求むる様な者ぢやが、衲の所にはそれがあるぞ。お望みならば御馳走しようか。臘月蓮花龜毛、數尺、同か異か、臘月裏に蓮花を咲し、其香を世界に滿たしめ、龜毛の長きをして轉長らしめ、上は三十三天、下は奈落のどん底迄も長らしむる者は誰ぞ。おい〳〵壽塔は何したのだ。まぜつかへしぢや、崩れてしまはあ。うん見たのか、海清寺へみんに來い、そこの壽塔が見えなけりやぢやぞ。盡謂日下挑孤燈、殊不知失錢遭罪。

四十二、南天棒は七十九代的々相承の祖

で、羅山に嗣いだ。慥に其印證せる嗣書がある。嗣書は即嗣法なり。嗣書は時あつて滅盡する事があるが、嗣法は盡きるものでない。代々嗣法の人ありて之を證するのである。嗣法は即ち唯佛與佛なり、唯祖與祖なり常人の知るべきにあらず。嗣法なきは天然外道なりと知るべし。そこで羅山は蘇山に嗣いだ、蘇山は卓州、卓州は峨山、峨山は白隱、白隱は飯山の正受老人、正受老人は麻布の無難、無難は愚堂、愚堂は庸山に、それより遡りて、祖々相授受し、關山、大燈、大應より支那の虛堂に入る。虛堂は運庵に嗣ぎ、運庵は松源、松源は密庵、密庵は應庵、應庵は虎丘、それより圜悟、五祖、白雲、楊岐、慈明、汾湯、首山、風穴、南院、興化、それから臨濟、黃檗、百丈、馬祖、南嶽、それより六祖、乃至初祖達磨、これより印度に入り般若達羅より乃至龍樹、迦毘摩羅、馬鳴を經て、阿難、迦葉に至り、迦葉は正しく釋迦、釋迦は迦葉佛に、それより過去七佛、相傳へ、恰も一器の水を一器に瀉すが如く、少しも交り物がない。釋迦以來衲に至るまで正しく七十九代である。其中間決して闕けたことがなく、金甌無缺にして恰も我國　天皇の萬世一系なるが如くぢや。我皇室も昔より入鹿や、將門や、

足利などの叛逆人あり、王位を汚がさんとしたこともあつたが、神靈の御稜威は中々侵すことは出來ぬ。必ず其の間に大忠臣が出て丶逆賊を打亡ぼして回天し奉ることになる。すでに德川時代には、皇室の陵夷其極に達し、外國人は兩頭政治とまで評したほどぢやが、國亂れて忠臣必ず出て、何れも義を泰山よりも重しとし、命を鴻毛よりも輕しとし、遂に王政維新の大業をなして、もはや皇國は土臺が益々鞏固になり天壤と共に無窮である。我禪もこれと同じく、古來數々難があつたが幸ひに祖々の刻苦光明で、どうしても種草は絶さなかつた。第二十四祖は惡王に首を斬られたが、これより先きすでに一子婆舍斯多を作つておいた。達磨は七度も毒害にあつて殺されたが、これ又すでに斷臂の二祖が出來てをつた。二祖も又異敎徒に殺されたが、纏風恙の三祖が出來てをつて、危機一髪の間にこの大法を維持した。それより六祖に至り、大度嶺頭の難があつたが、大法重如山で明上座をして降伏せしめた。六祖は青南二祖を生みだし。それより繁茂して沙界に遍くなつたが、會昌沙汰の難が出てきた。祖師方が皆船頭や漁師や米搗に身をくづし、萬難の間にこの一燈を消やさなんだ。我國に入つても、榮西の天台難、眞言難は、松柏の後凋に比すべく、大燈橋下二十年。身を御前問答に投じて、却て乾坤を打破し了れり。愚堂の時殆ど其究極に達したれども、酒屋の子無難を得て僅に身を以てのがる。無難は飯山の庶子半僧坊、正受老人を得て、報恩底を全うした。正受は白隱を得て懸糸の佛法をわづかにつなぎとめた。白隱に至り俄然として四十七人の善知識を得たが、あまり多くこれを得た反動にや其後は比較的に繁昌せぬ。しかしまあ今日に至るまで、二百有餘年、其間龍蛇混雜はしてをるが、祖脈は絶えなんだ。何處までも悅ばねばならぬ。しかし好い

人はもう大抵死んでしまうた。殘るは名利の徒のみて、死見解、相似の禪のみて、丁度德川時代の皇室見た樣な有樣で、禪道の衰頽は今日其極に達してをる。維新の頃には大和魂ある大忠臣が出た。禪も大革命の時節である。禪の大和魂は即不惜身命の菩提心である。菩提心は即南天棒である。この三尺の一棒がある間は、決してこの大法に指ても指さするものか。仰冀佛祖照鑑を垂れたまひて、この南天棒を一日も長くながらへしめて、革命の大業を成就なさしめ玉はんことを。たとへ虛空は盡きることあるとも、この念力は死せざるなり。我は是七十九代の祖なり。其負ふ處豈に少少ならんやぢや。

四十三、六十小刼猶如半日

これは法華にある。元來時に長短はない。人が長短をなすまてぢや。懲役の一日は、三秋の思ひぢやが愉快のことがあると月日の經つのを忘れてしまう。相承論が大分長くなつたから、讀むものが倦いたてあらうが、大法の爲めには身命を拋つてはないか。五頁や十頁を讀んて、倦くやうなことては、すべて大業をなすことは出來まい。況んや相承のことは禪の命脈で、一番大切なことぢや。禪に入るものゝ是非委質せねばならぬ所ぢや。元來日本人は物に倦き易いと、西洋人が評してをる。とても大發明は出來ぬというてをる。西洋ては演舌ても一演題で、一週日もつづけてやる漢がある。聽衆は益々殖るとのこと、日本ては十五分二十人ときては、沙汰の限りぢや。どうして名論を吐露することが出來やうか。著述ても斷片的に可成短く數多きをこのむ。どうしても長くよむに堪へぬ。書林もそうしなければ賣れぬから、讀者に阿諛して、そんな書物をこしらへる。ほめていへば機に投ずる良

方便とも云はれやうが、さりとては意氣地なきことではないか。兎も角も相承論は、長くもあらうが、大事のことぢやから、眼光を紙背に透して、讀んでもらいたい。熱心になると面白みが出て、身を忘れて讀むやうになるものよ。つまりは坐禪する氣になつてくれゝばよい。熱心に讀みよると、一日が、百二十刧の價が出てくるよ。

四十四、正法眼藏嗣書の卷拔萃

佛々必ず佛々に嗣法し、祖々必ず祖々に嗣法する。これ證契也。これ單傳也。このゆゑに、無上菩提也。佛(師家)に非れば佛(弟子)を印證すること能はず。佛の印證を得ざれば、佛となることなし。佛にあらずよりは、誰かこれを最尊なりとし、無上なりと印可することあらん。佛の印證をうる時、無師獨悟(天地一枚)するなり。無自獨悟(亡所知忘自己)するなり。この故に、佛々證嗣し、祖々證契すといふなり。この道理の宗旨は、佛々にあらざれば、あきらむべきにあらず。いはんや十地等覺の所量ならんや。いかにいはんや、經師論師らの測度するところならんや。たとひ爲說すとも、かれら聞くべからず。佛々相嗣するが故に、可知佛道は唯佛々の究盡にして、佛々にあらざる時節あらず。たとへば石は石に相嗣し、玉は玉に相嗣することあり。菊も相嗣あり。松も印證するに、みな前菊後菊如々なり。前松後松如々(少しもかはらず)なるが如し(去年今年皆青々)。如是なるを明らめざる輩佛々正傳の道にあふといへども、いかにある道得ならんと、あやしむにも及ばず。佛々相嗣し、祖々證契すといふ領覽あることなし。あはれむべし、佛種族に相似なりと雖も、佛子にあらざることを。子佛にあらざることを。曹溪(六祖大師)あるとき衆に示して曰く、七佛より慧能に至るに四十佛

あり。慧能より七佛に至るに四十祖あり。（祖佛同一見解）この道理あきらかに、佛祖正嗣の宗旨なり。いはゆる七佛は過去莊嚴劫に出現せるもあり。現在賢劫に出現せるもあり。しかあるを四十祖の面授をつらぬるは、佛道なり。佛嗣なり。しかあればすなはち六祖より向上して、七佛にいたれば、四十祖の佛嗣あり。七佛より向下して六祖にいたるに、四十佛の佛嗣なるべし。佛道祖道かくの如し。證契にあらず、佛祖にあらざれば、佛智慧にあらず。祖究盡にあらず。佛智慧にあらざれば、佛信受なし。祖究盡にあらざれば、祖證契せず。しばらく四十祖といふは、ちかきをかつ擧するなり。これによりて佛佛の相嗣すること、深遠にして不退不轉なり。不斷不絶なり。その宗旨は釋迦牟尼佛は、七佛已前に成道すといへども、ひさしく迦葉佛に嗣法せるなり。降生より三十歳、十二月八日に成道すといへども、七佛已前の成道なり。諸佛齊肩同時の同成道なり。諸佛已前の成道なり。一切の諸佛より末上の成道なり。さらに迦葉佛は釋迦牟尼佛に嗣法すると參究する道理あり。この道理を知らざるは、佛道をあきらめず。佛道をあきらめざれば佛嗣にあらず。佛嗣といふは佛子といふことなり。釋迦牟尼佛あるとき阿難にとはしむ、過去の諸佛はこれたれが弟子なるぞ。釋迦牟尼佛のいはく、過去の諸佛はこれ我釋迦牟尼佛の弟子なり。諸佛の佛義かくのごとし。この諸佛に奉覲して佛嗣を成就せん即ち佛〻の佛道にてあるべし。」以上よく〳〵參究するがよい。法嗣の原理といふ者が分る。是に難問がある。初めの初めは誰ぞと遡りつめると、通常皆其答に究す。これに付て定說あり。嗣書の卷末に曰く、先師古佛天童堂上大和尙しめしていはく、諸佛かならず嗣法あり。いはゆる釋迦牟尼佛は迦葉佛に嗣法す。迦葉佛は拘那含牟尼佛に嗣法

す。拘那含牟尼佛は拘留孫佛に嗣法するなり。かくのごとく相嗣して、今にいたると信受すべし。これ學佛の道なり。ときに道元まをす。釋迦牟尼佛はじめて出世成道せり。いはんやま釋迦牟尼佛入涅槃ののち、釋迦牟尼佛入涅槃ののち、釋迦牟尼佛はじめて出世成道せり。いはんやま釋迦牟尼佛入涅槃ののち、釋迦牟尼佛はじめて出世成道せり。いはんやまた賢劫の諸佛、いかにしてか莊嚴劫の諸佛に嗣法せん。この道理いかた賢劫の諸佛、いかにしてか莊嚴劫の諸佛に嗣法せん。この道理いかん。先師いはく、なんぢがいふところは、聽教の解なり。十聖三賢等のん。先師いはく、なんぢがいふところは、聽教の解なり。十聖三賢等のみちなり。佛祖嫡々のみちにあらず。わが佛々相傳のみちは、しかあみちなり。佛祖嫡々のみちにあらず。わが佛々相傳のみちは、しかあらず。釋迦牟尼佛まさしく迦葉佛に嗣法せりとならひきたるなり。釋迦佛の嗣法してのちに、迦葉佛は入涅槃すと參學するなり。釋迦佛もし迦葉佛に嗣法せざらんは、天然外道とおなじかるべし。たれか釋迦佛を信ずるあらん。かくのごとく、佛々相嗣して、いまにおよび、きたれるによりて、箇々佛ともに正嗣なり。つらなれるにあらず。あつまれるにあらず。まさにかくのごとく佛々相嗣すると學するなり。諸

阿笈摩教のいふところの劫量壽量等にかかはれざるべし。もしひとへに釋迦佛よりおこれりといはば、わづかに二千餘年なり。ふるきにあらず。相嗣もわづかに四十餘代なり。あらたなるといひぬべし。この佛嗣は、しかのごとく學するにあらず。釋迦佛は迦葉佛に嗣法すると學し。迦葉佛は釋迦佛に嗣法せりと學するなり。かくのごとく學するとき、まさに諸佛諸祖の嗣法にてあるなり。このとき道元はじめて佛祖の嗣法あることを稟受するのみにあらず。從來の舊窠をも脫落するなり。嗣法の原理はこの勘定では分らぬ。嗣法の廣大無邊にして際涯なき無量心に參ぜねばならぬ。時間の不可得なる所をも參詳するがよい。早く合點の行く樣にいへば、長いものと思はず、丸いものと思へばよい。究盡すれば自己にかへる。其無量の自己を究盡すれば、必ず嗣法の不可思議にして感應道交なることをしるべし。此故に左樣な重箱のす

みを楊子でせゝるやうな議論を捨てゝ、只佛々祖々、過去莊嚴劫より嗣法し來れる、佛法全塊を信ずべし。この全塊盡天盡地蓋古蓋今なり。何物の口吻を入るゝの餘地あらんや。われらは、この佛祖の惠命を相續し來れり。この自己を尊ばざらんや。悅ばざらんや。

四十五、徒然艸大尾。兼好八歳の時の難問

八つになりし年父に問うて云く、佛はいかなるものにか候らんと。父が云く、佛には人のなりたるなりと。(佛ももとは凡夫なり凡夫も悟れば佛なり)又問ふ、人は何として佛にはなり候やらんと。父また、佛のをしへによりてなる也と答ふ。又とふ敎候ける佛をば、なにがをしへ候けると。又答ふ、それも又さきの佛のをしへによりてなり給ふなりと。又問ふ其敎はじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候けるといふとき、父、空よりか降りけん、土よりやわきけんといひてわらふ。問ひつめられてえ答へずなり侍りつと、諸人にかたりて興じき。」遁辭は其究するを知るぢや。恐く兼好も、眼藏を拜讀したものだらう。八は、龍女の八歳をかりしにや。はた實際ありし事にや。何れにもせよ、いみじきとひなり。草紙などにかき捨つべき事がらにあらず。衲は若い時から徒然草を愛讀する。白隱のいふ通り、乳房細くちやよい子が出來ぬ。いろ〳〵本も讀むがよい。相承論の始の始は誰人も疑ふ所ぞ。

四十六、佛說三身壽量無邊經

文殊白佛言。我等從昔聞如來說法。如來何佛聞此說法。佛告文殊言。過四十一重內大院承大毘盧遮那說法。文殊重白佛言。四十一重內大院何者是耶。世尊復言。過十住十廻向。十地。等覺。內大院承妙覺地大毘盧遮

那佛說法」文殊重白佛言。妙覺地毘盧遮那從何佛承說法。」世尊復言。妙覺地毘盧遮那承無始無終一心一念本佛說法。」文殊重白佛言。無始無終一心一念本佛承何佛說法。」世尊復言。無始無終一心一念本佛承無心無念本佛說法。」文殊重白佛言。無心無念本佛承何佛說法。」世尊復言。無心無念本佛上更無佛陀。」無前佛。無後佛。」無心無念本佛以不思議爲體。無本去來。無三身性。無十界性。」

これも亦、相承論の參考となるべし。本佛不思議とは我等の直指單傳なり。教相は理なり、理窟なり。禪は事なり、事實なり。理なるが故に自由の分なし。實なるが故に誤りある事なし。經自ら證して曰く、日夜數他寶無半錢分と。速に來て嗣法の人となれ。嗣法の始めの始めも自知する時あるべし。わたつ海によせてはかへるしら浪のはじめもはてもしる人ぞなき。浪になれ。水になれ。南天棒になれ。

四十七、常不輕菩薩

といふ人は、外になんにもせぬ。人を見さへすれば、拜んで、我不敢輕於汝等汝等皆當作佛故といふ計りだ。これは記莂を與へに來たのだ。人皆佛性あり、やれば、屹度いけるぞとなり。斯なければならぬ。人を尊ぶは佛性を尊ぶのである、佛性は我なり。人を尊ぶは我を尊ぶのである。梵網にも我是已成佛。汝是當成佛。常作如是信とある。道元の重雲堂式にも、いまはしばらく寶主なりとも、のちにはながく佛祖なるべしとある。相承のことも何も不思議はない。自分の大權ぢや。本性ぢや。そしてこの世に取りに來たのだ。大事のことをあとまはしにして、些々たる肉慾にたましひを奪はれ、この本來本法性を棒にふるとは、ばからしき限りではないか。奮起せよ奮起せよ。南天棒は表て

は阿修羅王ぢや、が、心は常不輕菩薩ぢや。内祕外現とはこゝぢやぞ。

四十八、何故に南天棒と呼ぶ

南天棒はおれがつけたのではない、人がつけたのだ。二十九のとし、羅山の印可を得たが、羅山はおれに病在一師一友之處といふ、虛堂の十病を說いて、頻りに、遍參をすゝめられた。これは實に先師の大恩でもしおれがそのまゝ羅山の處ばかりに居たら、とても今日の南天棒はないのだ。さて羅山の命令により、遍參に出かけるとき、法戰は眞劍勝負でなければやくにたゝぬから、武具として可成太い南天棒をこしらへた。阿蘇山中から伐て來た。長さが六尺五寸。太さが一握に餘つた。これてぶつたゝけば、大抵の漢はへこたれる。深彫に臨機不讓師と彫りつけた。この棒を提げて、飄然として遍參に出かけた。趙州流で、われに勝れる者七歲の童子でも師とし、われより劣れる者百歲の老翁も、この南天棒でぶつくらはすといふ意氣ぢや。日本國中あらゆる師家をかたつぱしからぶつたゝいた。氣に入らぬやつがあると、喚鐘をとりあげた。然しこれは徒に我慢勝他の念にかられたのではない。眞に大法の衰へたるを慨嘆し、相似の禪を打破するといふ、報恩底より外はない。よい師家と思ふと、一夏以上掛錫した。庭詰はなんぼやつたか分らない。始終この南天棒は肌身を放さなんだ。商量には必ず南天棒を前においたものだ。そこで南天棒の名が高くなつて、世間でおれの本名をいふ者がなくなつて、南天棒と呼ぶやうになつた。物外めが拳骨をふるふやうから、拳骨和尙と呼んだのとよう似てをる。人が何處へ行ても、南天棒と呼ぶから、おれの方でもとう〳〵自稱するやうになつた。手紙でも書を書いても、南天棒南天棒で通るとになつた。衲の

體も南天棒になつた。南天棒、南天棒、求己全身不可得なりぢや。呵々。

四十九、本名

諱は全忠字は鄧州、別號を白崖窟といふ。いづれも四十年山を下らざりし、南陽の忠國師を私淑した所から出た名ぢや。名は大事ぢやから、好い名を撰ばねばならぬぞ。福澤は名稱教育といふことをいひよつた。不知々々其感化をうくる者だ。慧忠國師は鄧州の白崖山にをられた。これが支那で國師號の初りで、雪竇も一國之師亦强名南陽獨許振嘉聲とほめた。おれも比較するにたる人物ぢや。しかし今は南天棒の方が、よく世間に通ずるやうになつてをる。達磨が南天竺ぢやから緣起のよい所もある。そこてある人は棒の字を略し、南天和尚といふもをかし。

五十、南天棒今は八幡の僧堂にあり

衲の若い時、遍參の時は、臨機不讓師で、隨分師家をぶつたゝいた。それからいよ／＼法柄を握り店出しをしてからは、一人はたらかした。大抵室内に入つて來るやつに、この棒をくらはぬやつがない。道得南天棒ぢや。道不得南天棒ぢやから、何してもくらはした者だ。中には卒倒したやつも、大怪我をした漢もある。ありがたや師の恩思ふ如意のあとで、だれがぶつてくれる者があらうか。みなこれ大慈悲の涙である。しかし世がだん／＼と下つて來て、學人が次第に劣根機となり、室内へ入つて來る前に、怖氣がついて、入室の者がだん／＼へつてきた。偶々ぶつたゝいても、蚊子鐵牛で、一向手應がせぬやつばかりでおれも一番閉口した。終始一貫おれが身に隨侍してくれた、心なき南

南天棒今は八幡の僧堂にあり

天の棒にも、氣の毒になつてきたから、明治三十三年に八幡の僧堂に奉納した。又これ不風流處也風流の端的か。八幡は衲が最初の草鞋をぬいた處ぢや。因緣が深い。永遠に守護神となつてをるだらう。しかしおのぞみならば、何時でもとりだし、ぶつたゝくぞ。唯これ用不著なるが爲のみ。かしこに在りて、棒は定めて臂肉の嘆にたへぬであらう。いや其內世に出してやるから、今しばらく待ていよ。いや棒がなくてもこの腕がある。いつても出てこい。當年の意氣は益々軒昂ぢや。

一拳拳倒黃鶴樓。一踢踢飜鸚鵡州。有意氣時添意氣。不風流處也風流

五十一、衲の手の甲は胼胝になつた

誰れも指のつき際に四つの突起があるが、おれのは橫面になつて凹凸がない。この間も擊劍家が見て、あなたは若い時よほど劍道を御勉强なりましたなと、いうたが、なるほど若い時長州が四境にせまられた時は、金剛隊とて、坊主の軍隊を組織した位て、擊劍は好きて、山岡とも仕合したこともあるが手の甲の胼胝はそのためてはない。衲は若い時は橫に寢たことがない。眠くなると、南天棒て手の甲を無暗に打つたゝいた。血が出たことがたび〳〵あつた。それがとう〳〵かたまつて胼胝になつたのだ。其證據には左の方がおもにさうなつてをる。慈明は股に錐した。劍苦光明必ず盛大なりと感じたからだ。衲の腕はかくしてかたまつて、堅きこと如鐵ぢや。一人や二人をこの手て打、き殺すに造作はないぞ。さあどやつても不避喪身失命出て來るやつはないか。不入虎口不得虎兒ぢや。

五十二、遍參せし二十四名の師家

四十有餘年の年月間、南天の一棒を携へ、諸國を行脚し、商量鉗鎚をうけたる、各師家を略擧すれば、二十四名ほどある。其他一問一答、又は同行の人は數ふるに遑あらずぢや。

城州八幡僧堂　石應老師萬松軒
濃州天澤僧堂　万寧老師玉桃軒
尾州大仙寺　韜隱老師
遠州奥山僧堂　龍水老師積翠軒
遠州内野僧堂　伊山老師牧牛庵
濃州虎溪僧堂　雪航老師餐霞軒
豆州龍澤僧堂　星定老師
相州永田僧堂　潭海老師柏樹軒
江州永源僧堂　海洲老師
城州天球院　薩門老師接雲軒
肥州見性僧堂　蘇山老師鷲王軒
濃州梅谷僧堂　瑞道老師
豐後洞明寺　廉州老師
豐前永福寺　懶翁老師無住所軒
筑後梅林僧堂　羅山老師臨川亭
筑後梅林僧堂　無學老師樹王軒
豐後多福僧堂　鰲巔老師瑞應軒
筑後大生寺　惟庵老師一華庵
筑前聖福僧堂　愚溪老師
讃州玄要寺　馬應老師栽松軒
城州天授僧堂　越溪老師本光軒

伊豫長福寺　伽山老師日多窟
肥後見性僧堂　蘖岳老師松月軒
兵庫祥福僧堂　匡道老師要津軒

以上二十四人、今や全くなし。蘖岳老師明治三十年遷化す

とにかくこれ丈けは衲が一日でも師事した。一字の恩も廣大ぢや。

ましてや此一大事をや。しかし各々力用には優劣があつた。中には少々南天棒をお見舞申したのもあつた。吾は集めて大成する者で、要は菩提心のみぢや。一切衆生に手向ける一念あるのみぢや。二十四名の中羅山は且く措く。その外に於て最も惡辣を極めたるは、阿波の文静ぢや。當時鬼文静の綽號があつて、各道場を遍參して、喚鐘を奪ふを仕事としてをつた。長らく豐前の永福に住せられたが、無住所軒とつけたやうに、一處不住であつた。衲は一番こゝて力を得た。おれより長く居た者もあつたが、修行事には骨折たのはない。おれの隻手音聲は文静流ぢや。一寸諸方にないやつぢや。又この師家中には、隱山家の機鋒の鋭いのも、卓州家の綿密なのも居る。何の幸ぞ。衲は一々其蘊奥を盡すことを得た。佛天の加護を悦ばねばならぬ。今時の學人に遍參する漢がない。そこで見地が偏狹で、とても師家分上の資格がない。それで店出しを急ぐと來て居る。禪がどうして盛にならうか。衲は切に遍參をすゝめる。しかし悲いことには、頼む木影に雨もるで、正師がないから、ことによつたら、徒勞に屬するかも知れぬ。困つた者ぢや。只請ふ南天下に來たれ。

五十三、東山下の左邊亭

衲が機關三百則の一ぢやが、室内ではどえらいしらべがある。學人の

血の涙ぢやが、この出故は知らぬ人が多い。東山下は五祖演禪師ぢや。五祖は白雲端の一子で、牛窓櫺はこれから出たのだ。この東山下の左邊亭に居を搆へて、大いに五祖下の家風を擧揚し、當時惡辣無比と稱された人がある。實は西川の鄧師波といふ五祖の一子ぢや。これより禪林惡辣の人を稱して、東山下の左邊亭といふやうになつた。阿波の文靜みたやうな人てあつたらう。あゝ文靜すてに去ること久し。左邊亭は只名のみのこれり。行てみよ今鎌倉は麥畑。

五十四、黃龍三關

は無門關の最後に出た公案ぢや。黃龍三十餘年も試みたが、一人も證契した者がなかつたとのこと。兜卒の三關はいけても、これは中々物ぢや。黃龍は七宗の一つで、拳來踢報といふて、向ふ一倍の宗旨ぢや。

うつかりすると命とりぢや。

第一關。我手何似佛手　なんの變つたことはない。摸得枕頭背後不覺呵々大笑ぢや。自携瓶去沽村酒とつけた。佛手は向上門ぢや。向上にとらへらるゝなよ。

第二關。我脚何似驢脚　驢脚は向下門ぢや。それもかはつたことは無い。未擧步時踏著。一任四海橫行とはよくいうた。還來著衫爲主人衲は著語した。

第三關。人々有箇生緣　だれもよう知つてをる。日々用ゐてをる。五祖豈藉爺緣ぢや。人々氣宇如王ものか。さり乍ら佛眼遠禪師の偈がほんに分らぬと、生緣は手に入らぬぞ。肉既還母骨既還父。用什麼爲身學人直到者裏若見得去廓清五蘊呑盡十方乃爲偈云。骨還父、肉還母。何者是身。分明聽取。これは故事から出た。那吠太子折肉還母。折骨

還父。然後現本身運大神通力爲父母說說、これぞ大孝ぞ。經に父母所生身即證大覺位といふも、全現法王身といふもこゝぢや。あゝ大なるかな生緣。看取せよ〳〵。驢脚も、佛手ももはや自在ぞ。華嚴に擧體融通といふも、實參の上でなければ、畫餅飢を癒すに足らぬぞ。これから南天棒の生緣を暴露するぞ。以吾爲隱乎二三子。吾無隱乎爾

五十五、如何是南天棒生緣

時は天保十年巳亥四月四日朝六時

處は大日本國肥前國上松浦郡十人町

父は鹽田大助、後壽兵衛と改め、惟和と號す。小笠原佐渡守の藩士、母は多喜子、同藩牧山氏の二女であつた。

衲はこの三緣をかりて無而忽有にこの世に生れ出た。しかし衲の生れたときには別に異香も發しなかつた。靈光もなかつた。七歩して天上天下も唱へなんだ。只をぎや〳〵〳〵と、呱々の聲を發した計りだ。どうも支那人は歷史傳記をかざる氣味がある。其人の德をほめるため、無きことをもわざと作る事がある。それは反て其人の德を損ずることで、本人は地下によろこばぬであらう。道元和尙などは、かやうなことが大きらひで、彼杜杖子化して龍となりて、虎難を免れしことなども、後世人の故造說らしい。禪はすべて正直を本とす。維摩には直心即是道場とあるではないか。碧巖に、初生孩兒還具六識否といふ公案がある。これを透過すると生緣の根原が分つてくる。

五十六、七歲母を失うて無常を觀じた

七ツの年母が死んだ。悲哀に堪ず深く世の無常迅速を觀じ、竊に出家

得道の念を萌せり。母の法名を、壽昌院秋月智光大姉といひ、同藩西寺町觀音寺本堂南側に葬る。偶〳〵近松寺陽溟和尚中陰の讀經に來る。宿緣の致す所にや、頻りに寺に行きたくなり、和尚に從ひ寺に入込み、自宅に歸るを欲せざりしと。且近松寺に居て毎朝必ず母の墓にまゐつた。父は其孝思を感じ、名を孝次郎とあらためた。今に至るまで、兩親の位牌は、内佛に安置し、朝夕必ず誦經怠りしことはない。こんなことは別に掲ぐる必要はないやうな者ぢやが、たしかにおれは孝心のあつた者には相違なかつた。舜は旻天に號泣し、其聲天に朝し遂に帝位に上れり。衲の今日あるは、蓋しこの時の孝の一念に胚胎し來ることなきを得んや、大いなる哉孝道。孝經に曰く、孝萬善之本、所敎之由生と。梵網經に、孝順至道之法。又曰孝名爲戒と。不亦宜乎

五十七、十一歳坊主になる

母の死後はひまさへあれば近松寺にゆき御墓の掃除をするを無上の樂みとし、坊主になりたくてたまらなかつたが、父は中々許さぬ。母の死後もはや五年となつた。しかも衲の志がいつも坊主々々といふものだから、とう〳〵父も根氣負けをして、出家を許した。近くは母の菩提を弔ひ、遠くは普く一切に及ぼさんとてなり。衲の歡喜知るべきなり。平戸雄香寺麗宗和尚に投じて薙髮し、全忠と名をつけた、時正に嘉永二年四月であつた。翌年十二月達磨忌を幸に得度式を行うた、棄恩入無爲稱是大報恩の誓をなした。得度の度は渡るなり、生死流轉の海をわたつて常樂涅槃の岸に到るなり。自度はもとこれ他度の爲めのみ、直に是三界の大導師四生の慈父となるなり、誰れかこの好因緣を悅

ばざらんや。

恩を棄るは恩に報ゆる所以てある。この故に曰く一人出家九族生天と、すでに剃髪染衣して愛著を絶てり、身これ一切衆生の身なり、戀々として家を顧みるの邉あらんや。得度以來は家父親屬をとふことなく、專ら修行を事とせり、所謂過家門不入ものである。

五十八、雜業報經三種の孝

佛は雜業報經に三孝を說いた。事孝、行孝、盡孝、これなり。前二孝は世間の孝ぢや。報恩一世に止る、儒道も亦之をいふ。盡孝は無限なり、盡未來際なり、所謂大孝是なり。出家得度は即大孝てある。一切を救盡するのてある。父母も亦其中に包裏さる、豈に大ならずやぢや。此故に六祖は母を棄てゝ黃梅に赴き、黃檗は渡頭に母の死を顧みずして去り、洞山も亦母を捨てにき。只是大法重きが故のみ、他に大孝あるが爲てある。曾て瑩山和尙の傳光錄を讀んだ事があつた。孤雲和尙の悲母病すてに急にして最後の對面をのぞむ、使すてにかさなる、一衆悉く行くべしといふも、制中犯すべからずとして行かざりき。本師道元和尙ほめ玉ひき。曰、佛祖の軌範衆議よりも重し、まさしく是古佛の禮法なり、悲母の人情に從ひ古佛の垂範にそむかん、すこぶる不孝の過なんぞ免かれんや、ゆゑ如何となれば、今まさに佛の制法をやぶらん、これ母、最後の大罪なるべし。それ出家人としては親をして道に入らしむべきに、今一旦人情に從ひ、永劫沈淪をうけしめんやと、卒に衆議に從はず、衆人舌をまくとあり。實に衲の意をえたるかな、君子千里同風ぢや。今時の坊主は親の所へ小使錢をせびりにゆく、間がよけりや還俗もする、節操のないことおびたゞしいよ。これが三界の大導師か、お臍が笑

ふぞ。玄沙有言曰、大丈夫先天成心之祖と。思之思之。

五十九、十八歳初めて僧堂に掛錫

おれが坊主になつてからといふものは、日夜佛經祖錄をよんだ傍ら漢學をやつた。祖錄の中では臨濟錄が好きで、序文は毎朝佛前で念誦した。本文も大抵暗記した。一夜三更感慨胸にせまり、寢ねどもいねられず、やはり臨濟錄を讀て居た。偶々「道流出家兒且要學道。秖如山僧往日曾向毘尼中留心、亦曾於經論尋討。後方知是濟世藥、表顯之說。遂乃一時拋却、即訪道參禪。後遇大善知識、方乃道眼分明、始識得天下老和尚知其邪正。不是娘生下便會、還是體究練磨、一朝自省」といふ所に至つて、忽ち卷を掩うた、何程讀んでも他の寶ぢや、畫ける餅ぢや。正師を得て實參實究一回根原に徹するにあらずんば、總ては無駄ごとぢやと。

行脚の念勃々として起りてやまず、翌朝本師に向つて行脚のことを請ふたが、尙早論をとなへて中々聽き入れぬ。殘念でたまらぬから、三日三夜絕食した。このまゝ平凡に世にあらんよりは、寧ろ死するに如かずと決心した。本師遂に志の奪ふべからざるを知り、遂に許した、實に嬉しかつた。今に忘るゝことが出來ぬ。この一歩が今日ある所以ぢや。どうして忘るゝことが出來やうか。丁度其晩平戸松浦侯の御用船が出るといふので、急ぎこれに便乘を乞うた。御用船は三百石位で赤く塗つてあるから、赤船と稱へ、津々浦々に立ち寄る。今の郵便船ぢやが、蒸汽船でないから、中々手間どる。風があれば進む、風が荒れると何日でも港に留まる。大阪まで三十日かゝつた。それから伏見の三十石に乘り、くらはんかのこゑをはじめて聞いた。橋本について八幡の僧堂に乘り込んだ。時是安政三年丙辰九月三日であつた。古

例により庭詰二晝夜、旦過寮一週間にして、遂に掛搭を許された。萬松庵、石應宗眠大禪師に相見して、無字の公案を授かつた。撥草瞻風は只圖見性ぢや。見性は即見佛である。今は見佛の第一歩である。若衲が絶食の強硬手段勿りせば、何處にか今日あらん。皆是佛祖の冥助なり、たれか感泣せざらんや。古歌に立そむる志だにたゆまずば、龍のあぎとの玉もとるべし。八幡はかはきりぢやから、いつもなづかしく思ふ。手植の松も生長してをる。木像もある。南天棒も納めた。白崖窟の講本も百冊計り皆納めて置いた、たれでも見らるゝ。行いて見よ。電車も汽車もある。山城國綴喜郡八幡庄。江湖道場圓福寺。俗に達磨堂といふ。聖德太子の達磨を安置してある。洞ヶ峠も傍にあり、臺山の婆子を氣取し、茶店の婆々の迹もある。今の師家は曾て衲の室に入りしことのある、大德管長の見性宗般和尚である。

六十、廿三歲始めて羅山に相見す

羅山和尚に始めて隨身たは文久三年で、衲が二十三の年であつた。丁度大阪法雲寺の雪安居をすまして、八幡へ歸錫した時であつたが、熟ら當時の師家を見るに、よい人は段々死んで有力の人は至つて少い。どうも心細くなつて來た。石應さまはもはや御遷化ぢや。目下帝國に於て吾師とたのむべきものがない、獨り南筑梅林の羅山老師は古今獨歩。進止活脫。接衆自在。而も室內孤危險峻なりと聞き、頻に欣慕に堪へず、俄に暫暇を乞うて忽然として筑後に下り、梅林に掛包し、直に含輝室に入て呈所解。た師乃ち古人種々の諸話をあびせかけたが、應答滯碍なく一瀉千里なりき。師云這箇是古人底那箇是全忠底速道々々。某甲云、道無古今幸莫弄閑言語と。師曰く、汝然るも、首山綱宗偈に向て一轉

話を下し來れと。予少く擬議す。師打曰、劍去久矣と。且曰、汝の見地是なる事は是なりといへども、山上尙ほ山あり、須く子細にすべし。否んば何を以て人天を度するを得んと。歡喜千萬感涙濕襟。これより勇猛精進寢食共に廢する事屢々なりき。夜間は解定を待ちて獨り坐蒲を携へ、ある時は有馬家の墓原に端坐し、或時は深井の井桁の上に箕踞し、毎朝曉鐘を聞いて歸單するを常とせり。刻苦聊か古人に愧ぢざる者あるか。明くれば文久二年光陰矢の如し、はや二十四歲とはなれり。更に誓願を發して云く、吾師鐵鎖の法窟を打破し、印可證明を得ざれば、死すとも是の地を去らずと。願心凝つて鐵の如く、解定後は必ず大井(深さ筑後川に達すると稱する者)の井桁の上に坐すること三年一日の如くであつた。又暫くも臥單せず横に寢ざること六年間なりき。幸ひに正師の鉗鎚其宜きを得たると、佛天我願心をあはれみ玉ひ、何の幸ひぞや二十七歲室內微細を盡し末後の牢關を打破し、最後の一決を得て印可證明正に的々七十九代の佛祖位に入れり矣。爲後念仍如件

件は虛言をつかぬ獸の名ぢや。これの皮で太皷を張り打てば嘘をつくやつは皆死ぬるといふことぢや。我禪には塗毒皷といふのがある聞く者皆死すとある。稜師備師不奈何喪身失命有多少、大喝一聲云、看脚下(碧巖二十二則參照)淨土宗でも一枚起請といふものがある、この章は衲が一枚起請て後の爭ひを防がんためにかくは物しつ。我は是れ羅山正傳の一子。南天棒鄧州也矣。

六十一、大石に躓かず小石に躓く

これは各自室內で經驗のあることぢや。難透といへば別物のやうに思ふ。五位十重禁といへば、怖氣がたつ。法に難易なく機に大小ある

のみぢや。道無南北祖、人根有利鈍といふもこゝぢや。會則事同、一家不會千差有路で、公案も一つ確固り徹底し、どの公案にも融通し、一つにしてゆくやうな交通點を見出すと萬事自在てあるが、一案去て一案來り、いつも初音の心地こそすれぢや。仕方がない一十百千萬いつまで行つてもはてしはない。衲が首山綱宗も無字と少も別つた事はないのぢやが、妙な語が入つて居るものぢやから、うつかりけつまづく、力のたらぬ所ぢや。今日になつて見ると慚愧に堪へぬ。綱宗の偈は虛堂錄で大分やかましい。白隱は息耕錄開筵普說の附錄で、古人を駁して御座る。室内の胸腹病ぢやが、最初の無字の打開が痛快でないからだ。どこまでも最初の一歩が一大事ぢや。無字は終り初物ぢやぞ。首山綱宗の中に、水牛也不識と著靴水上立といふ語がある。これが一寸見にくい。其境界にならねば其境界は知れぬ。衲の躓いたもこゝぢや。ナニ心身脫落して、畢竟空の處に體達すれば、そんなことは朝飯前のお茶の子ぢや。空が空を使ふ何の痕迹があらうか。何の罣碍があらうか。しかしいくら痛快に打開いても、どうも餘習が殘りやすい者だから、室内は諸方の微細を盡さぬと、つまらぬことに躓き、無眼子の學人に馬鹿にさるゝことがある。そうなると幾分か度生邊に妨げがある、衲がよい手本ぢや。幸ひに衲も二十四流の師家について、微細に微細を盡したから、今では七事隨身ぢやが、容易の看をなさぬがよい。無門云、麁飡易飽細嚼難飢。

六十二、良哲居士惠昌尼に一拶さる

良哲居士は有名なる庵原平四郎ぢや。三日三夜の勇猛で忽ち入無想定石鞏以來第一人となつた人。白隱の室に入るや入らぬに汝徹せ

りと許れた位ぢや。ある時惠昌尼が、良哲さん近頃大歡喜を得られたと聞く、浦山しいことぢやが、尼に一問あり、尼今老たり起つ能はず。願くは手をかけずに、われを起たしめよと。居士千方すれども叶はず。尼をして笑轉た解かざらしめた。それでも三日があひだ考へたとある。やつと分つた。再び尼をして彼事を問はしめた。直にやつてみせると、今度は尼が舌を卷いたとある。良哲の如き者でもさうぢやから、法は仔細にせねば無益だぞ。遂翁の火の餞別といふのがある。伊山の大休も雲衲が起單するときには、この問題をかけたとの事ぢや。水引をかけてくれえとか、煙草一ぷく吸ふとか、くださる物は夏もお小袖といふて頂戴するとか、いろ〳〵の答話はするが、問ひに答へるといふ相對的ぢやから、算盤の問題と同じ事になる。天地を動かす勢力がない。其師家の肚を草鞋がけで驅けまはる境界がなければ、どんな偉らい答も皆徒勞ぢや。答るときは上無攀仰下絶己躬て、相手を見づに壁立萬仞に出てこねばだめだよ。不見言、欲得親切莫將問來問。問在答處。答在問所。この語仔細あり、崑崙にし去るなくんば可し。

六十三、慢心は室内の禁物

下るほど人は見上げる藤の花。へりくだる者幸也。天は其者の有なれば也。謙遜は進歩を意味す。下問を恥づるの師家はとてもよい子は出來ぬ。道ばたのむくげは馬にくはれけり。增上慢人退亦佳矣ぢや。山上尙山あり先入爲主て、己惚とかさけのないものはないといふてはないか。意外のことがある者ぢやから、遼東の豚と思うても馬鹿にしてはならぬぞ。衲が柏樹軒に初相見の時、斷常二見を離れて如何が人の爲に說法せんとひつかけられた。予直に一掌を與へて傲然

たり。師色を起して曰、入地獄如箭と。其夜煩悶寢る與はず。翌朝未明入室して昨日のことを懺悔す。師曰く懺悔の事作麼生。予只禮拜するのみ。文靜の外、潭海の所では短時間であつたが、得力少なからざりき。衲が機關三百の中にこの則があつた。中々よい則だ　不了我爲君決。

六十四、欽山、定上座に殺されんとす附黄楊木禪の事

欽山。雪峰。岩頭。いづれも德山下で、至つて中がよい。常に三人同伴して行脚した。欽山は美男子で、時々女難があつたが、さすがに道心で打ち消した。この中で岩頭が大機で、雪峰は綿密であつたが、雪峰も岩頭に從門入者、非家珍といふ一句で、鼇山成道と大に叫んだ。成我者、友也ぢや。欽山はとかく力がよわい。よわいやつは自慢をする。

強いやつにかゝると至て體裁のわるいものぢや。あるとき三人同伴して、當時有名な臨濟和尚に參ぜんと出かけた。丁度途中で定上座に邂逅した。定は臨濟下ぢやから、大に悅んで、臨濟の消息を聞くと、あやにくや臨濟はすでに遷化せりといはれ、三人の失意いかばかりぞ。せめても直弟子で、しかも高足の定上座に、臨濟の宗風のをもかげをも聽かしてくれへと、請益した。定上座曰、臨濟上堂してつねに、赤肉團上有一無位眞人常從汝等諸人面門出入。未證據者看看。と擧せらる。時有僧出問、如何是無位眞人。師下禪床把住云道道。其僧擬議。師托開云。無位眞人是什麼乾屎橛と。もうこれは法の決極の所を提唱した。五逆聞雷といふ臨濟の宗風を、そのまゝ生きうつしにした。南天なら憐兒忘醜とつけべえが、三人各自所見をのべた。圜十の芝居よりよつぽど面白い。流石に岩頭は不覺吐舌。馬祖の一喝百丈三日耳、

聾すといふ處ぢや。黄檗聞き得て不覺吐舌もこゝぢや。知音別在青山之外ぢや。雪峰は臨濟大似白拈賊と賊意と看て取ておさへた。衲のと大同小異よ。さて最後に欽山めが何不道赤肉團上非無位眞人というた。さあ事生ぜりぢや。欽山は他二人と異りねばついてをるから、定は直に看てとつた。直ちに欽山の胸倉をとらへて、汝こしやくな。無位眞人與非無位眞人相去多少、速道速道とつくこんだ。欽山に轉處の妙用がないから、面黄面青でなんとこたへんすべをも知らず、目をぱち〳〵してふるへて居た。岩雪見かねて仲裁していはく、この男はまだ若いからなんにもしらぬ者、われらに免じて無禮を許してくれられよと。定上座曰、若不是這兩箇老漢擊殺這屎牀鬼子と。ひどいひどい。さすがは臨濟下の龍象ぢや。一擧一動大將軍の作略がある。欽山はいつもかやうなしくじりをする。碧巖の五十六則では、良禪客にかつたやうに見える。欽山打七棒云、且聽這漢疑三十年というたから、諸方の師家は欽山の方がよいと思うてゐるが、さすが白隱は千古の卓見で、欽山の大歇闕を唱へられた。三つ子の魂百までもぢや。増上慢のある人は延びやうがない。叢林これを稱して黄揚木禪といふ。黄揚木はのびにくひ木ぢやから出た名ぢや。黄揚木になるなよ。山上尚有山を忘れてはならぬぞ。

六十五、山上有山の古詩

三體詩にはよい詩が澤山ある。寒山詩。千家集。錦繡段。山嶺集。唐詩選などは禪に入用がある。古詩は多くは不用意に出てをる。構造するものが少い。自然に無意識に出たのが多いからだ。然し今こゝに掲げるのはあまり巧みに出來すぎてゐるが、あまり骨を折てこ

しらへた者てはないらしい。衲はこれを難透の中の倩女離魂の拶處につかうてをるが、こたへるやつが少いよ。其意中を解けば掬すべき情がある。晩唐の孟遲の作ぢや。

山上有山歸不得。夫の身の上を思うて、彼方此方に浮かれ歩いて、歸家穩坐家庭の趣味を味ふことなきあはれさよ。公案の途中に迷ひこんで、行けば行くほど遠くなる。歡樂極哀情多。少壯幾時奈老何ぢや。

山上有山は、出るといふ字になる。

湘江暮雨鷓鴣飛。川の流れはいと靜ぢや。それに日は暮れる。雨は降る。おまけに鷓鴣めが、行不歸と啼いてをる。今頃は何處にどうしてござるやら。案じられた物ぢやわい。鷓鴣といふ鳥は行不歸と啼くとかや。そこで一入思ひがます。

蘼蕪亦是王孫草。人が慰めて、其内に歸つて見えますといふけれど、どうも迷ひが深い人ゆゑ、案じられてたまらぬ。公案ばかりあさり歩いても、果てしはない。五位や末後の牢關と見て來たやうな虛言をつき、歸つたと夢には見れど、身は依然たる途中の人。蘼蕪といふ草の一名が當歸といふから、其名計りなら、まあ緣起はよいともとれやうが、にくさもにくし、其一名が王孫草ともいふてはないか。王孫遊兮不歸春艸生兮萋々。といふ詩があるてはないか。どうせ惡いくせがついたのぢやから、とてもこつちのものにはなれまいが、さりとては折角の願心に向て相すまぬ。あゝたれか惡辣無比の大宗師は居ぬものか。こんなときの南天棒ぢや。八幡からとりだしてもらいたい者だ。金ならたつた三百兩。可愛い夫をころすのかと、無間の鐘をついた女もあるてはないか。夫のためならいのちは入らぬ。法の爲めには

莫送春香入客衣。やすざとりの香を嗅いで、これでよいと思はるゝと、ます〳〵浮かれ歩いて、萬刧歸つては來ませぬ。天人が見たら、人界の馥郁は、犬豚の臭ひがするとて鼻をそむける。本木にまさる梢木はない。わたしのこの千萬の思ひがつゆほども、夫の心中を射ぬものか。願くは客中の我愛夫の爲めに、婆々談議をよしてたもれよ。南無大慈大悲の大宗師さまよ。

まあ斯樣な現成がある。緣なき衆生は度しがたし。南天々々と評判ばかりてはだめだよ。名を聞かんより、不如見面ぢや。南天棒をいらはねば痛さは知れぬぞ。まあこの詩に參じて見解を呈し來れ。容易の看をなすと入地獄如箭ぢやぞ。仔細があることよ。

頻呼小玉元無事。只要認得檀郎聲

六十六、啓予足啓予手

孔門の高足曾子は死に臨んで啓予足啓予手というた。從來の行爲に人に見せられないやうなことが、無いといふことぢや。何處でも調べて見よといふ意味ぢや。吾禪では是語をありがたく應用して居る。必竟赤裸々、八面玲瓏の境界を指したものだ。しかし生前とやかくもてはやされても、眼光落地の一念こそ最後の判決ぢや。棺を蓋はなければ分るものでない。どうか啼いて生て笑て死にたい者だ。おれの日常は如來の遺囑通りにやつてをる。仰不愧天俯不愧地ぢや。七十七年一日も寧處なしぢや。禪をやると世を遠かり、山にても入つて、安樂に暮せる者と思ふは間違ぢや。衆生濟度の大責任を帶びては遊ぶひまはないものだ。其間に人の知らない安樂の所がある。生死の外

に立てをるからだ。しばらくは雲の上にも出て丶見よ、雨の降る夜も月をこそ見ん。といふ境界は世人の知ることの出來ぬ所ぢや。枕上更無閑夢安の返り點が違ふと、とんだことになる。無閑夢安てはだめよ。無閑夢安てなければならぬ。丁度參政の權を得て國會がひらけると、樂になると思ふが、中々責任が重くて、反つていそがしくなる。そのかはり今迄の通り壓制政府の下に卑屈の人民となることはないやうなものよ。さらば、衲はこの時間もこの命もこの少し計りの金でも、皆如來のあづかり者だと思うて、ちよつとても無益に用ゐたことはない。金のことなどは一厘一毛皆手帳につけて出納を明かにし、徒に信施を消しなかつたを證し殘して置く。所謂啓予足啓予手ぢや。何時死んでもよい、生れぬさきから用意がしてある。いや常に足て外に待つことがないから、別に用意する必要もない。造次於之顚沛於之ぢや。どうか世の同胞をして、悉くおれに同化せしめて、八風吹けども動ぜざる好景色を作りたいものだ。

しかしどうしても、時が足らぬ。なることなら、一ヶ月を三十五日にしてほしい。今最近、大正四年五月中の行履を示して時を無益に費さぬ證據を見せやう。西宮海清寺はおれの住職地で、ことに二十五專門道場の一つぢや。これも大切ぢやが、各地の會は廣い、且熱心家が多い。重者先牽かるの原則で、西宮に歸山することはめつたにない。ところ定めぬ雲水境界は衲僧の本分ぢや。

五月中日割　□法要　○日曜　△道中　●は見だし

△五月一日神戸達磨會より西宮へ歸山す。留主中諸方より依賴の揮毫百枚を了し、雲衲をあつめ垂誡普說し、獨參時を嫌はず。揮毫は筆法や巧拙を顧みないから、至てはやい。一時間に四十枚位はわけはない。

□二日西宮入制攝心。故吉田新吉居士の埋葬式に臨む。

●三日巨鼇會。提唱入室深夜に及ぶ。

●四日接了、何人をとはず。何時をとはず。何處をとはず。入室といへば何時でも聽くのが、南天の家風ぢや。生死事大無常迅速ぢやからなアー。

△五日西宮より名古屋擔雪會行。途中京都聖護院へ立寄る。

●六日。七日。八日。居士大姉入りかはり。立かはり。入室。喚鐘の聲は絶えたことがない。睡眠時間。三時乃至四時間。

△九日午後八時名古屋より東京行夜汽車。衲は生れて魚を食つたことがない。辨當は精進の卷鮨を出立前に拵へ、小瓢に酒三合。切符は必ず赤。夜行を擇ぶは坐睡によろしきが爲てある。

●十日。十一日。十二日。十三日。十四日。十五日。東京雪山會ぢやことに會員が多い。百名近くあつまるから、入室を皆に行渡らかすには、中々飯を食ふ暇がない。いや入室を聽くことは飯よりも好きぢやから、食はずもよいのだ。

●十六日接了。提唱。衲は何れの會でも提唱は一日限りとしてをる。提唱すると入室する時間がないから。衲はいやだが、會員中强ひて請ふ者あり。不得止やつて居る。提唱で分る者ぢやない。どうしても入室して實參實究の外はない。

此十六日は午前に提唱をきりあげ、舊四月三日誕生正當を機とし、居士連の企圖で、衲が七十七の祝賀會を催した。會する者百餘人、餘興などありて盛大てあつた。衲は頗る滿足した。

□十七日東京法要

●十八日道林寺瑞光會。これも例會。入室參禪を主とす。

△十九日信州飯山正受老人二百年遠忌應招出發

□二十日正受庵法要執行。了つて揮毫數百。結緣の爲め何人をとはず書與へた。殆ど夜を徹した。

●二十一日攝心及び臨濟錄提唱。正受老人は白隱を生出せし人。此人なかりせば白隱なし。白隱なくんば今日なし。皆老人の賜なり。此行萬分に報いん微衷のみ。豐野驛より三里馬車あり自働車あり。禪界のゼルサレムぢやから、一度は巡禮に出かけねばならぬ。木像あり、遺物あり。衲はそゞろ感激に堪へなかつた。これで二回目ぢや。

△二十二日飯山分散神戸行。例により赤切符夜行。在庵中殆ど不睡に付、汽車中坐睡しつゝ、二十三日午後七時半に神戸に着いた。

六十七、病中と雖も參禪をたゝず

飯山には、山々雪殘り居る位にて、寒氣意外に强かりし爲め、風を引いたと見え、此夜發熱三十九度。咽喉いたみ、頭痛寒氣甚しきも、待設けたる獨參を病床中にて聽き十一時就眠。翌午前三時起床。佛前誦經一時間。それより諸方から來て居た數十の手紙を閲し、六通返書を認む。既にして朝參の居士詰めかけ來たる。朝まだき熱もさめ、氣分もよきまゝ、室內てかはるがはる法戰をやつた。中には臨機不讓師というて、衲に一掌を與へるやつもある。牛の眞似をして衲につッかゝる漢もある。何れも一生懸命ぢや。其熱心に醉はされて、病苦を忘れた。十時頃一同退參した。さあそれから俄に寒氣がして熱が出た。電話で西宮から懶隱をよんだ。どうやらヂプテリャらしい。尿を調べると痼疾の萎縮腎めが頭をもちあげ蛋白が增えた。懶醫はこはゆゝしき大事ぢやと絕對に安靜を命じ、血淸を注射して去つた。鬼の留守にまめ

といふことがある。惡いかもしれぬが來るまゝに入室を聽いてやつた。勿論床の中ぢや。此夜櫟來り大いに命にそむきしを責む。かれは病床に侍坐して動かず、斷じて學人の出入を禁じた。注射が利いたか、翌日はすつかり癒つた。實に苦しかつた。咽頭の腫痛と熱と頭痛がひどかつた。死ぬるのかとも思うたが、天がまだこの南天棒をころす時が來ぬとみえ、否生けて置かねば都合がわるいと見えるわい。おれの方ではいつでもよい。しかし八十まではおれの方で都合があるから、迎ひに來ても追拂うぞ。

おれはめつたに病氣にかゝらぬ。神戸のやうなことは近來ない。いや四月には足の腱鞘炎が膿潰して隨分いたかつた。東京の岡田が手術してくれた。一週間は安靜法をたもてというたが、これ又內々で床中で入室を聽いた。好きの道は反て病を癒す功があるかもしれぬ。

案外よう癒つた。

神戸達磨會はいつも三日ときまつてをる。病中ながら攝了を全して直樣大阪長風會へのりこんだ。もはや大丈夫ぢやが、念の爲め後藤幾太(長風會幹事)に見てもらうた。まだ本當に癒つてをらぬとて、藥を吳れた。到る所で醫者の居士が澤山をるは重寶ぢや。

●二十三、二十四、二十五、神戸達磨會。櫟隱來り前講無門關一則助けた。おれは熱はあつたが例により講座に上つたが、反つて大聲でやつつけた。

●二十六、二十七、二十八、二十九、三十、大阪長風會。

●三十日一寸西宮歸山。入室織るが如し。

△三十一日朝八時東京行。

さあ見よ何してもたらぬ。半田へも行けぬ。大垣在の本郷村の無門

會へも行くことが出來ぬ。三十五日てもまだ足らぬ。さきに無寧日といふたことの間違なきを證するがよい。啓吾足啓吾手はこゝぢや。一日不爲一日不食は八百丈大師の專有物ではないぞ。又禪者ばかりてない。何人てもこの觀念がなければならぬ。人は働きに來たのだ。金があるからとて、飽食暖衣逸居無教者近禽獸ではないか。遊んでばかりゐて、何も働きをせぬやつは。人間の資格がないのぢや。この連中は金持に多いやうだ。七十七の衲の行動を、藥に煎じて飲むがよい。

六十八、竪子何をかなさん

おれの一日のことを一々書けば、三百や四百ページになるだらう。それは思想をとる寫眞てもなければとても出來ぬ。只おれは無益に時を費さぬといふことだけを誓つておく。大法のため、菩提道心の爲のみて、我身あることを知らぬぢや。さて今の師家の家常をみるに、果して如何。夜は寢たい丈けぬく〳〵と寢ね。畫は自分の好きなことをやる。茶の湯。圍碁。將棋。骨董。書畫の稽古。甚だしきは商賣人になつて書畫骨董を賣買するやつがある。衆生濟度の大任を帶びてをるものが、書畫の稽古をするいとまがあらうか。雪舟兆殿司も禪宗の罪人ぢや。かれを禪師といふ人がないてはないか。仙崖も亦同類ぢや。あるとき仙崖が精神こめた山水をかいた。自ら誇て古今獨歩といふ。一居士つら〳〵みて、何思ひけん忽ち引裂いた。仙驚き怒る。居士襟を正うして曰く、あまりよく出來たからこはした。かやうなよき畫が後世にのこると、あなたを禪者といふものはない。畫師とのみいうてあらう。それてどうして衆生濟度の大任を全うする